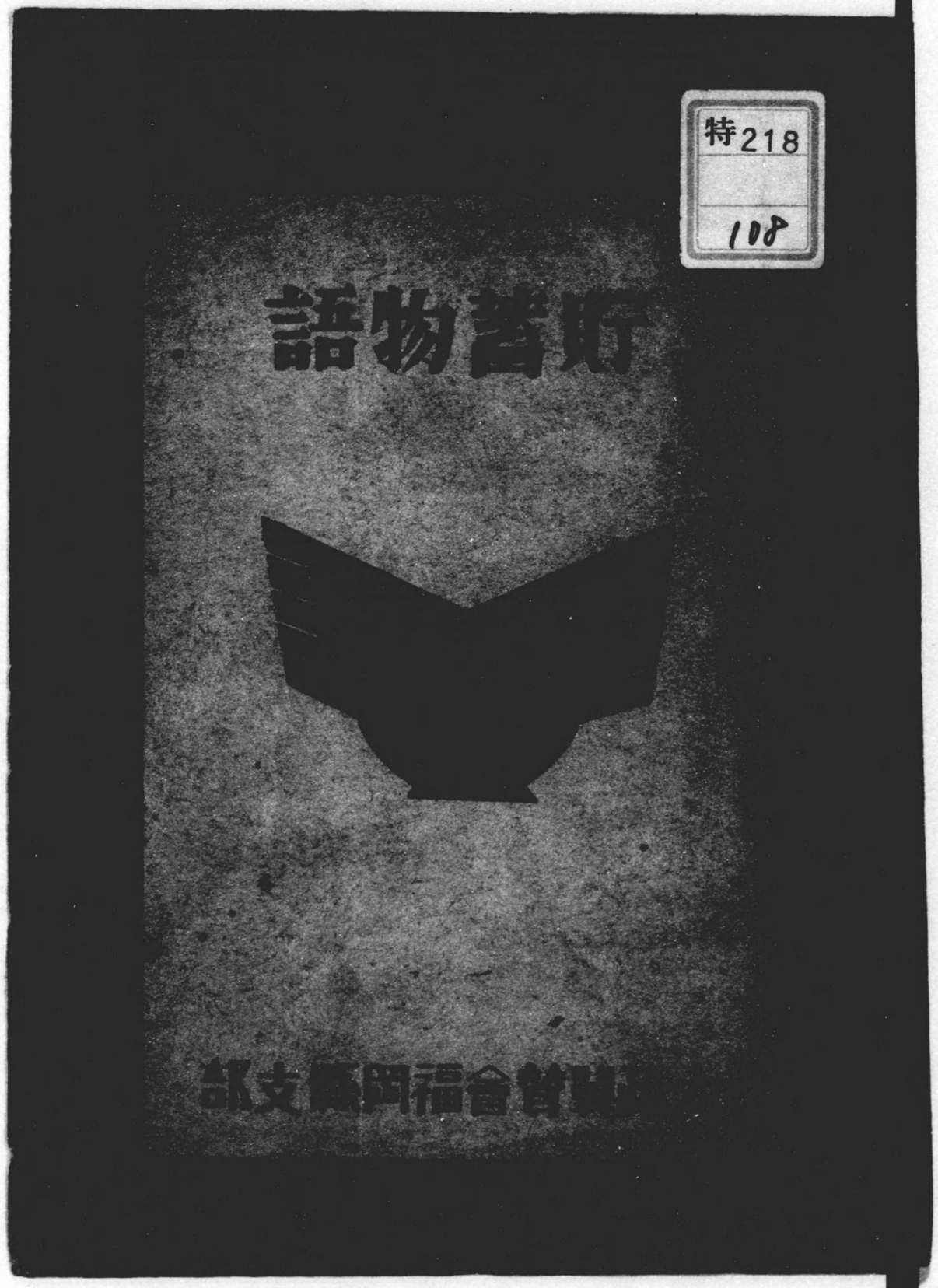


0029138000

0029138-000

特２１８－１０８

貯蓄物語

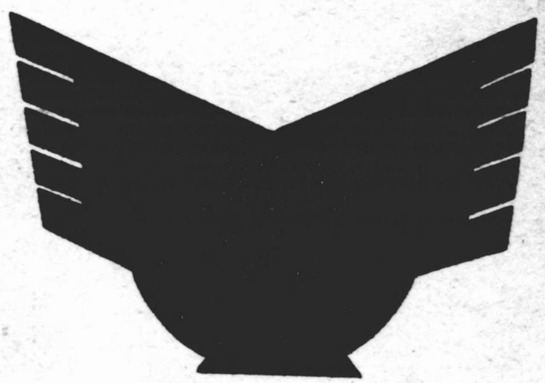
大政翼賛会福岡県支部

昭和１８

ADI

特218
108

語物蓄貯



大政翼賛會福岡縣支部

特218
108

貯蓄物語

大政翼賛會福岡縣支部

序文

大戰爭の樣相は愈々深刻化してきた。

國と國とが、興亡の運命を賭する鍔競合は始まつた。

今や、戰爭の苦惱は交戰國共通の現象となり「この難關を敢闘突破なし得た者こそ、最後の勝利者なるべし」とは、何れの國の指揮者もが、強くその國民に呼掛けてゐるところであらう。

しかり。最大の難關に逢着し、よく忍び、よく耐へ、不撓不屈、戰ひ抜きたる國民こそ、勝利の榮冠は燦として輝き凱歌は高く揚げ得るであらう。しかして、烟硝の香、なほ、消へやらず、戰勝の國に勝関強く響く時、一方、敗戰國の亡國的悲慘の狀慄然として言語に絶するものあるべし。

『戰爭は斷じて勝たなければならぬ』

今日、吾等は祖國の大非常に臨み、吾等の愛國は微塵も觀念的であつてはならぬ。

何も彼も戰爭完遂へ、その原動力たる國策の遂行へ、只一筋、實踐あるばかりである。

鎬を削る國家總力戰だ。屍山血河の火線のことは言はずもがなである。

戰場は戰場、生産は戰闘、貯蓄は戰果であらねばならぬ。

しかして、吾等の一手一足が、敵國殲滅の鐵拳として、重慶に、ロンドンに、ワシントンに天下るべし。

『思へ、大戰爭の眞只中、自らの心構へとその行動を』

玆におくる一片の物語りは、文藝的に多少の粉黛こらされたりと言へども、その骨子は愛國の赤誠溢れる幾多の人々の血涙、努力の尊き體驗記に他ならぬ。

吾等は『事の成るや、その成る日に成るに非ざる』をよく知るものである。

この物語が如何に貯蓄報國の信念固き人々の、刷新せられた生活の上にたつ、勤勞の汗滲む孜々たる行動の朝と實踐の夜の結晶記であるかを思ふ時、物語り中の人々に吾等は襟を正して尊敬と感謝の赤心を捧げる次第である。

最後に、この物語りを生むに當り、福岡縣文化聯盟（特に橋爪政成、矢野朗、古海卓二諸氏）の御協力と、その勞を深く謝するものである。

昭和十八年一月八日

實踐部長　有富治人

貯蓄物語

目次

一、曉の太鼓（糸島郡可也村大塚國民貯蓄組合）……一
二、街の中にて（久留米市明治通三丁目西隣組國民貯蓄組合）……四七
三、貯金の神樣（八幡市波多野鐵工所國民貯蓄組合）……八一

曉の太鼓

糸島郡可也村大塚國民貯蓄組合

(一) 謀叛氣

三月の末といふけれども、玄海の風の吹荒れるこの地方では、まだ肌寒い日がつゞいてゐた。殊に近年まで、衰微に衰微を重ね、艱難の年月を經てきたこの土地では、春が來たからと云つて、なか〳〵一陽來復の喜びに浸ることなどは、まだ程遠い氣持だつた。

しかし、年が明け、麥も伸び、菜種の植附けも濟してみると、流石にほつとした氣持になつて、格別苦しかつた過去の成績を振り返つてみようとする人々であつた。

こゝ、可也村小金丸部落の大塚では、こんな早春の一日をえらんで、彼等が過去一年間に擧げた勞働の成績を發表する、綜合共進會なるものを催した。

場所は、この小字の西寄りにある滿福寺といふお寺の本堂を借り、この日は老若男女が擧つて集ることになつてゐた。

寺の本堂は南向きで、風の冷い日ではあつたが、春の陽差をいつぱいに受けた樣のあたりは、ほ

か〳〵と暖くて、燥ぎまわる子供等の頬は赤く、額に汗をにぢませてゐるものもあつた。本堂の内部も入々でいつぱいで暖かかつた。誰も彼もが勘からず興奮して、上氣してゐた。それといふのも、この内部の壁には一段高く、色々の統計表が張られてある。それらは皆、彼等がこの一年に收めた成績表で、個人個人のものが點數で表はされたり、或はグラフで示されたりしてゐて、いかなる老人子供にも、自分の家の働き振りや收穫高が、一目見てわかるやうに出來てゐた。

この日は、また、役場から、村長や農會長、或は部落會長や各隣組長が出張してきて、先ほどから挨拶や説明につゞいて、此らの人々の臨席のもとに、最も優秀な成績を擧げたものへ授賞があつた。その後、村長の激勵の辭があり、農會長の講評などがあつた。人々は、それらの辭に、或は滿足げな笑聲を發し、或は發奮を誓ふもの、また殘念さを洩すものなど、各自の成績に從つてそれ〴〵興奮の狀態にあつたわけだ。

共進會は、かうして、相當の意義をこれらの人々に與へて終つたのであるが、集つた人々が三々伍々連立つて、大凡本堂を出拂つたころ、片隅に坐つてゐた二三人の聲が、急にはつきりしてきた。さうして少々怒氣を含んでゐる。よく見ると、喋つてゐるのは吉村小七郎といふ男で、なほよく見れば、少々酒氣も帶びてゐる。

いつの間に飮んだものか、小七郎、興奮と酒とで呂律も怪しい。が、相手の腕をとらへて、しきりに何か口說いてゐる。

「だいたい、あんなものを作つて、何の役に立つんぢや。あんなものが無うたつちや、わしら、一生懸命働いとりますばい。一生懸命働いとりや、いんまに財産だつちや殖えもする。それを、のう、なんにも、あんなもんを慥へて、大勢の人の前に、ひとの身上をさらけ出さないでもよかですばい。そりや、慥へるのはあん人達の勝手さ。何でも物數奇な人たちぢやからな。しかし、なにも、わざ〳〵人樣の前に張り出さんてもえゝぢやないか。のう傳さん。お前さんがたのやうなものもちは構ふめいが、わしらのやうな貧乏人は、大した恥さらしさ。女房や子供は、人樣の前で、顏もよう上げまつせんばい。」

小七郎が口說いてゐるのは、やつぱり今日の成績表發表のことだつた。なるほど、この發表については、以前から大分反對意見をもつものもゐたといふのだが、それを隣組長の吉村猛雄が押切つて發表したのだ。だから、これが發表と同時に、既にその前で、かなりの騷ぎが演ぜられてゐた。反對派のいふのは、何もかも洗ひざらしで、恥さらしになる、といふのが強い。小作で、組中でも最も貧しい暮しをしてゐる小七郎などが、極力反對するのも、まんざら無理でもなかつた。

また小七郎が摑んでゐる相手の吉村傳も、困る一人だつた。彼は組中で最も富裕だつたが、それだけに、他人に自家の内情を知られたくない、といふのだつた。

「さうぢや。わしらも、これにはまつたく困る。なんでもかんでも曝けだしでは遣り切れないやな。猛雄さん達も、まつたく思ひ切つたことをしてくれたもんぢや。」

二人はなほもこの事について罵り合つた。同じやうな立場で、同じやうに考へてゐた者に眞澄や、八郎や、能武次がゐた。また勝美も庄島五郎も大體同じ意見で、彼らは口にこそ出さぬが、まつたく猛雄さんも餘計なことをしたと考へた。

それでは組長の猛雄さんといふのは、どんな人物だらう。幸ひとその場に居合せなかつたが、この人こそ、現在の大塚の貯蓄組合長をも兼ね、同時に農事實行組合長で、この大塚を天下の大塚組合に築き上げた本人である。小七郎等の不贊意は後刻彼の聞くところとなつたであらうが、いまもし、彼がその場に居合はせたなら、彼はこの謀叛氣に、どんなに情けない顏を見せたであらう。

(二) 更生農村

さて、この隣組を天下の大塚組合と、どうして云つたかといふと、この隣組の貯蓄組合は、去る昭和十七年九月卅日、五百億突破國民貯蓄功勞團體として選ばれ、九州邊陬の一寒村の一貯蓄組合でありながら、總理大臣より表彰狀を授與された。そのため組長吉村猛雄氏は東上して、首相官邸に於ける授賞式に參列の榮をかち得たものであつた。

それは、なんと云つても一大驚異であつた。名もない九州の果のちつぽけな貯蓄組合が、よもや天下に名をなさうと、その時まで誰が考へたらう。まして先頃までは、貧窮のどん底まで落ち貧乏村の一部落の一隣組ではなかつたか。

地圖を開いてみやう。今までどんなに探しても見當らなかつたこの地の地名も、もはや九州地方の地圖の上には、大きく鮮かに印せられる筈だから。

福岡市の西端今川橋からバスに乘る。筑肥線の沿線前原町で降ると、そこから又櫻井ゆきのバスがある。それに乘つてものの五分もくると初といふ部落で降される。そこから西に向つて十町ばかりでそこに達する。詳しく云へば福岡縣糸島都可也村大字小金丸の大塚である。

大たい糸島郡の可也村は、糸島富士の名で呼ばれる可也山によつて、またその名を知られてゐる。可也山は、遙か玄海に突出した北崎半島のまんなかに秀麗な山容を示してゐて、富士に似て端正な姿は、遠く福岡、唐津方面よりも望まれる。その山の麓に同じ名の可也村が散在してゐる。

可也村の戸數は約六百、その大字の一つに小金丸がある。小金丸は更に大塚、西部、親山の小字に分れてゐてその大塚が天下の大塚になつたわけだ。

いまこの大塚を訪ねて、前述の通りに初でバスを降りてみる。初には可也村役場があり、それに

並んで可也國民學校がある。その角を折れ曲つて西北方にのびた道路を辿ると、すでに前面には小金丸の部落の點々と散在してゐるのがみえる。路々人に訊ねるまでもない。一筋路でそのつゝかゝりが、訪ねる大塚組合のあるところだ。だから、あまり先を急がず、こゝらで一寸道のまん中に立つて、あたりの景色を眺めてみることにする。

最初に眼につくのは、なんとしても山だ。山は我々日本民族の母胎だ。山を切離しては、郷土といふものを考へられない位ひだ。殊にそれが名高い高山だとか名山だとかであれば、一層緊密な血のつながりを感ずるやうだ。

ともあれこゝの部落の南ま近く、名山可也山が聳えてゐる。親山の如きは、その麓を這ひ上つて、懐に抱かれた形だ。大塚は耕地を隔てゝ之に對してゐるが、反對にこの背後を見ると、低くはあるが不知火山が、屏風で圍つたやうに北風を防いでゐる。しかしこの山の屏風を越せば、野北、櫻井、玄海灘の荒濤が、ぢかにどう〳〵と打寄せる鼻である。

海はまた西にもあつて、それを隔てた對岸に唐津市がある。半島だから、三方海に圍まれてゐるわけだが、兎に角、こゝは二つの山に挟まれ、東西にのび擴つた平野の耕地を持つてゐる。

耕地はすでに整理が出來てゐて、整然と區劃に割られた土は、見るからに豊穣な色を示してゐる。どの耕地にも、必ず二三の人の働く姿が見える。その人々に婦人が多く見受けられるのは、非

常時局の感を深めさせられる。然し、また、その婦人達のどの顔を見ても、何等不安や心勞の色の見えないのは、自ら土地の氣風を表してゐるやうだ。いづれも健康の色艶よく、働くこと、耕農をこの上もなく喜んでゐる様が見受けられ、鍬揮ふ手も、車曳く腕も、見れば見るほど甲斐々々しい。日本一の幸福な更生農村の姿がこれだつた。

初めてこの土地を看るものは、ひたすらにその見事な耕農生活を驚歎するだらう。然しこの土地の數年前を知つてゐたものは、餘りにも素晴らしい更生振りに、或は間違つて他の土地に來たのではないかと、自分の眼を怪しむかも知れない。それほど村は變貌したのだ。數年前の、あの見窄しい、といふより寧ろ哀れだつた寒村の姿は何處にあるか。負債で、どの家もこの家も首が廻らず、喧嘩やいざこざの絶えなかつた、あの頃の村人の澁面は、いま何處にあるか。いつたい、いつの間に、誰が變へた相なのか。

昭和八九年、その頃の村は苦境のどん底にあつた。働けど働けど嵩む負債は、山のやうにのしかゝつてくる。しんじつ、首を縊らうか、娘を賣らうか、と考へる百姓が一人や二人ではなかつた。

その頃、このやうな悲慘な可也村の運命を一身に引受けて、村長に就任したのが、前代議士簡牛凡夫氏であつた。

簡牛氏は就任した最初、餘りにも悲慘な村の實狀に茫然となつた。然し、次の瞬間には、すでに決然と心に決するものがあつた。まづ、全村八〇〇〇〇圓の借財をいかにして返濟すべきか、これがこの村の運命を決するに、第一の主眼點となつた。彼は一日村民大會を開催して第一聲を發した。

しかしその第一聲は、何等耳新らしい事でもなければ、小難しいことでもなかつた。

彼は叫んだ。

「働け。精いつぱい働け。今日我々でできることは、もはやこの事以外には何ものもない。さうして、それがまた我々を救ふ唯一つの道なのだ。諸君は云ふかも知れぬ。俺たちは從來もよく働いた、と。なるほど諸君は、これまでもよく働いた。しかし、働いてなほこの窮狀にあるのはどうしたことか。或は諸君は、これだけ働いてこの有樣は、多分運命の神が我に組せざるが爲であらうと云ふかもしれぬ。或は又、何かが、何か必須の條件が缺けてゐるのではないか、と考へるかもしれぬ。而し諸君、考へて見られよ。開拓せずして、何處に我によき運命の神があるか。また自然完備した我境涯に、それ以上何の缺けたる必須條件があらう。要は働くことだ。働いてなほ報ひられざるは、働きのまだ不足してゐる爲だと思へ。十の働きをして甲斐がなければ二十の働きをせよ。二十働いて尙不足なら三十、まさに粉骨碎心、死に身になつて働け。もはや、我々村民を救ふものは、この必死の働き以外に何ものもなくなつたことを信じて、諸君に働いて貰ひたいのである。」

彼は、いかなる事態が起らうと、この「働き」の一手で押通さうといふ強い決意を披瀝したのであつた。さうしてこれを細別して、早起勵行、時間嚴守、天引貯蓄、等の數項に分けて、速刻その勵行を迫つた。

(三) 貯蓄組合結成

元來が純朴で勤勞を愛好する村民達には、この簡牛氏の聲明は、強く反響するところがあつた。なかでも、大字小金丸部落の大塚では、やがて貯蓄組合結成を期して、二十四戸の住民が會合を開いた。

その日、昭和十年二月十一日、紀元節の佳日に當つて、業務を休んだ人々は、その日の午後から區長吉村猛雄の家に集つた。その日、まだ如月の風は冷めたかつたが、天氣は日本晴の上天氣、新らしい運命を開拓する第一歩を踏み出すにふさわしい、よい天氣だつた。

「わしらは喃、これからみんな新らしく生れ更るのぢや。昨日までの自分は死んだものと思つて、今日から新しい一歩を踏みだすのぢや。」

吉村猛雄はいさゝか興奮してゐるやうだつたが、それだけに堅い決意の色が、濃い眉のほとりに動いてゐた。彼はまだ四十に二つ三つ間のある、最も働き盛り、壯年の意氣旺溢せる年齡だつた。從つて集る者も、考朽固陋は避けて、いづれも實行力を多分に持つた少壯の士ばかりだつた。たとへば組合長吉村猛雄の卅七に準じ、副組合長吉村博が卅五、西組十二戸の班長吉村義雄が卅歲、東組十二戸の班長吉村守が廿五歲、新らしい世代を双肩に擔はうといふ意氣込み盛んな人々だつた。誰の顏にも血氣が躍動してゐた。

大塚全景

「村長さんは、ひたすら働けの一點張りぢや。じつさい、働くことより外には、わしらでやれることはなんにもないからの。」

「わしらは從來とて、相當よく働いてきたものぢや。それでゐて年々この窮狀は、やつぱりまだ〳〵働き足りないからに違ひない。」

「十の働きで報はれねば、二十働け。二十で報はれねば三十——か。」

「他につくす手だてはないのぢやから、所詮簡牛村長の云はれる通り、粉骨碎身ぢやよ。」

素朴な人々は、村長の意見を全面的に受け容れてゐた。

「それでは更生策の第一項として、早起奬勵は、どういふ方式でやつたものだらう。これはあの村民大會以來かなり努力して、實行に移してきたが、まだ〳〵足りねば、一層張り込んで早起きせねばならぬ。」

組合長は人々の顏をみまわした。

「さうぢや、さうぢや、それも協力一致して、揃つて早起きするやうに努力せねばならぬ。」

大たい先年の村民大會に持出された簡牛更生策の第一項に「早起勵行」があり、その爲め各寺院は梵鐘、各區毎に「起し太鼓」をたゝいて起すことゝいふのがあつた。しかしそれが實際勵行されたところは少なかつた。

當大塚組合では、相當勵行されてゐたものも、それを更に强化するために、輪番の「起し番」といふのをつくることにした。それは別に板切れに各組員の氏名を記した札をつくり、それを廻して輪番を知らせた。輪番に當つたものは、從前から組合長の家の前の、組合共有の農具小舍に置かれ

た太鼓を、季節に依つて多少の相違はあるが、大體夜明け前に太鼓をひき出して敲かねばならぬ。各戸はその音をきいて、一齊に雨戸を繰るが、なほ起忘れて寢入つてゐる家へは「起し番」が廻つて行つて起してやらねばならぬ。かうして起き上つた部落員全員は曉天の星を戴いて野良に出なければならぬ。——事は平易、準備は簡單、それでこの事は滿場一致の可決をみた。

次いで第二項の「時間嚴守」。

これはなにもこの土地だけに限られた事ではない。集會、會合の際に所定の時間を守らない惡習慣は、日本全國いづれの農村、いづれの都市にも見受けられる圖だ。福岡地方では、所謂「博多時間」なるものがあつて、會合や集會は所定の時間より必ず一時間位ひは遲れて集る。所定通りの時間を守ることは、なんだか不見識で、大人のなすところではないかのやうに考へてゐる。從つて主催者側も、定刻より一時間前を所定の時間とせねばならぬといふ不都合を敢てする。共に日本人に共通の惡弊の一つである。

簡牛村長は疾くにこれを痛感してゐたが、今やこれを村民更生に必須な緊張の一要項としたわけである。

しかし大塚組合では、もしも彼等が第一要項の「早朝就耕」を立派に習慣づければ、この第二項は、言はずして行はれるものと確信した。勿論彼等はこれにも協力一致を誓ひ合つた。

さて第三番目の要項の「天引貯蓄」について。こゝに彼等大塚組合員の面目と特異性があつたわけだ。もちろん天引の方法は、簡牛村長の唱導によつて、村民擧つてすでに貫行に移つてゐたわけであるが、その努力と、その能率とに於て、當大塚組合は他の部落の追從を許さぬ目覺ましさを發揮したわけであつた。

彼等はこれを「お初穗貯金」と稱した。彼等は春秋二期の收穫物は勿論、その他一切の農產物を、その出荷に當つて收穫の何割かを、神佛に捧げるお初穗の氣持で天引し、また產業組合を經過しない蔬菜果實等の副業の收益も、全て收入の幾割かに相當する額を預金に向けた。さうしてこれらの天引に關する業務は、收穫物が產業組合に納められると同時に、產業組合の手によつて行はれ、預金もまた組合の手によつて預け入れられる仕組みになつてゐた。これは村民大會によつて圖られ、村民全體の申合せによつたものであるが、大塚部落が率先これに參加したのは云ふまでもなかつた。

さて、いま彼等大塚組合員は、天引貯金の率割合について審議した。さうしてほゞ左の通りに決定した。それによると天引初穗は

一、米　自作田は一反につき一俵
　　小作田は一反につき半俵

一、麥　一俵につき拾圓は手取り殘餘を貯金
一、菜種　一俵に付拾壹圓手取り殘餘を貯金
二、野菜果實類　その收益の二割に相當する額を貯金
彼等は以上の諸項を決定し終ると、さすがに疲勞の面持をみせたが、緊張と決意を深く身邊に漲らせて、その日の會合を解散したのであつた。

(四)曉の太鼓

どんどんどんどん、どんどんどんどん、どこどこどこどこ、どんどこどこどん、どこどんどこどんどこどんどん……。
突然曉闇を破つて太鼓が鳴り出した。「起し番」の松尾治助が、定刻をまもつて打ち出した太鼓だ、あちらこちらで雨戸を繰る音がして、灯が見えた。早速竈の下を燃しつけた火も見えた。二三人が珍らしいものでも見るやうに家から出てきた。空は降るやうな星が冴えてゐる。
「お早う。」
「お早うござす。」

挨拶したのは正責と新七らしい。お互に白い息を吐いてゐる。
「ようしまつとりますなあ。」
「まだまだ寒うござす。なんといたつちや三月、さう、四月ごろにならにや、ほんな春の陽氣になりまつせんばい。」
「しかしこの分なら、今日もお天氣は上天氣ですわい。」
「さやうさ。當分はお天氣がつゞきまつしようたい。」
そこへ重樹も出てきた。
「お前さんたちや、えらう早うござすやなあ。もう田圃ですかい。」
「いや、なんの。あたしや、まだ顔も洗つとりません。むつくら起きると、すぐ出てきてみましたんや。昨日あんなにして決めたもんぢやから、今朝はもう、ずつと前から眼がさめての。太鼓はまだか〳〵と、これが鳴り出すのを待つてましたんや。」新七が答へた。
「そりやあ、また、おつそろしく張り切つたもんや、あつはつはつは……」
「わしはな、第一番の「起し番でな、時刻が氣になつて、氣になつて五時になる前に、三度も小便に起きましたわな。」と次助が云つた。
「いや、起きてしまへば多少の寒さは、かへつて氣分が引きしまつてな。ところであんたんと

こ、今は朝から何しなさるとな。」

「しごとかな。早う起きても、仕事を考へとかにや、なんにもならんばいな、あはゝゝ……。うちや、今日は、まづ麥踏みに出かけようと思ふとが——」

「さようか、なるほど麥踏みなら暗いうちにでもでけるからの。わしや、早速秣刈りにゆこうと思ふとる。」

「わしやもう中揚げぢや。なんによらず、增產の目的でな。」

新七は兩掌で顏を擦りながら、改めて眞面目な顏で云つた。

「しかしのう、こんどの事あ、ひとつ、どうでもかうでも、遣りぬかにやこて。今までだつちや、相當張りこんでやりかけたけど、どうも永つゞきのせぬことが多うてな。わしらは、とにかく、遣れば遣れる人間ぢやと思ふが、どうかの。」

「そりやそうぢや、これまでだつて、まんざら腰折れ仕事ばつかりぢやなか。かなり目立つた仕事もしとるんぢやからの。」

「いづれにしても、非常時のまつ只中ぢや。非常時は、これでのうては切りぬけられぬと覺悟せんけりやのう。」

彼等は、最初の朝の感激を、元朝のやうな新らしい氣持で出發しようとしてゐた。

それから後は、來る朝も來る朝も、曉闇にうごめく人の姿が、どこの田圃にもみうけられた。時には、あまりに暗くて仕事がわからず、藁を燃して働く姿もあつた。

「これなら遣れるぞ——」

まづ安心したのは組合長だつた。組員が日毎猛烈に働き出した姿は、彼の眼にはつきりと映つた。彼は家庭に於ても率先して早起きを勵行し、妻女や子供を督勵した。また、時には「起し番」と共に、農具小舍の前に出て、組合の早起き狀況を視察し、太鼓の音に起き出す氣配のない家には、自ら行つて雨戸を敲いた。

「早起きをして、暗闇の大地に立てば、一種壯嚴な氣持が湧いて來ますのぢや。田圃のまん中で、明けゆく空を仰げば、淸らかな、まつ直ぐな氣持になれますのぢや。塵の毛ひと筋の邪まな氣分も無くなりましてな。」

彼は誰にでもかう言つて話した。それは、彼にとつて、もはや一種の信仰に近いものになつてゐたのだ。

組合中の人々は、かうした彼の强い信念に引摺られるやうに、じつによく早起きを勵行した。組員は誰もが農業に從つたのではなく、一戸の寺院——前揭の滿福寺——もあつたし、麩の製造所もあつた。また國民學校の訓導もゐたし、役場の吏員もあつた。此らの人達には、考へやうに依つて

は、特別に早起きをして、增產に役立つものを持たぬ者もあつたわけだ。たとへばお寺の和尚さんの如きは、こと更ら暗いうちから起き出たところで、看經を濟ませば、畑を作るではなし、手持無沙汰な時間がないとは云へない。實さい又、隣り部落のお寺では、一度太鼓と一緒に鐘をたゝいておいて、再び床にもぐり込むといふ、狡い和尚さんもあつたのださうだ。

しかし、この組合の滿福寺は、先年まで宣撫班を志願して、軍の特務機關となり、數年中支に活躍された小富士一秀師であつた。本來僧侶は民衆の指導者でこそあれ、民衆の決意をさまたげるやうな不埒はない。殊に小富士師は、歸還後も福岡市にあつた司令部に勤務されたり、又九州配電會社に仕事を持つた關係で、人一倍早く起き、約六キロの道を前原町まで、まつ暗な頃に自轉車を飛ばされねばならぬのだ。從つて、朝の看經は「起し太鼓」が鳴るが早いか、既に師の本堂に初まつて、ボク〳〵ポク〳〵と木魚の音が、暫くは朝の空氣を震はせて流れるのだつた。

「なるほど和尚さんも早起きだ。和尚さんの勤行はな、やつぱりわし共の勵ましになりますのぢや。朝早くからこゝの木魚の音をきゝますとな、お和尚さんも一生けんめいぢや、わしらも負けずにやらにやならぬと、みんなが奮起しますのぢや。」

話のついでに、こんなことを一秀師は云はれた。それかあらぬか、毎朝一秀師も眞劍な看經で、組合長の猛雄をはじめ、誰もが師の心意氣をよろこんだ。

その他訓導の庄島常五郎も、役場吏員の井島惠吉も、麩製造者の山恥健兒も、負けずに早起きの勵行者だつた。彼等は云つた

「早起きは三文の德ですがなー」

(五) 共進會成績表

人々はまたよく働いた。それこそ死もの狂ひになつて、晴れた日はもちろん、雨の日も風の日も、寸暇を惜んで奮闘した。彼等には閑農期といふものがなかつた。來る日も、來る日も、何かの仕事があつた。さうしてそれによつて、たとへ如何に零細な收益でも、收益を擧げるとならば一心不亂に働いた。男も女も、老人も子供も、手をつかねて日を送るといふ日はなかつた。その間に四季がそれ〳〵の贈物をして過ぎてゆくのだつた。

五六年が夢のやうにすぎた。餘りに短かかつた歲月のやうに思はれた。それだけ自分を忘れて働いたのだといふ事は、まだ考へなかつた。兎に角發足してから數年が早くも過ぎ、幾度か記念すべき二月十一日を通り越した。さうして今年の三月末の、やうやく春の惠みの目立つて來た頃、彼等は福滿寺の本堂に集つて、最初の成績發表會を開いたのだつた。

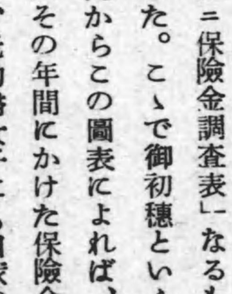
その日、人々の顔が、どんなに興奮に燃え立つてゐたかは冒頭にしるした通りだ。それは多少の不滿もあつたけれど大凡歡喜の聲に蔽はれたと想像されたい。たゞその後に、不圖呟やかれた不平の聲を、ついでにつけ加へておいた。事をなすときには、常にかうした多少の抵抗は覺悟しなければならぬものだから。

しかしさうした障害は、やがては消える。滔々と流れる水は、かなりの障害物をも押流すことが出きるのだ。ことに、眞理に双向ふ個人感情から出た反抗のごときは、まさに水に浮んだ泡沫のやうなもので、おのづから眞理に融け去る性質のものだ。吉村小七郎や、同傳が、不圖しも洩した不滿は、つまりはさうした種類の反抗で、組合長吉村猛雄らの眞意がわかれば、やがて、その奈流のやうに流れ出した組合員の意志に押流され、融けて消え去るものだつた。

他人の前に自家の貧困を曝したり、反對に金持が財産高を知られることを嫌つたりするのは、全くつまらぬ個人感情だ。國民總進軍の意氣にもえて、ひたすら增產に邁進する組合員として、疾く に棄揚されねばならぬ感情だ。增產は個人の利益を目標としてゐるのではなかつた筈だ。最初の動機こそ部落や村の窮狀打破策にすぎなかつたが、後に到つては、折から勃發した日支事變や、大東亞戰に到つて、俄然彼等の態度を革めた。增產は、もはや單に、一部落、一村の利益の爲ではない。國家總力戰の必須要件となつたのである。

しかし、こゝではもう一度話を初めに戻して、組合長吉村猛雄が、組合員の增產奬勵について、其後にとつた方法についてもつと詳しく說明してみよう。

組合長吉村猛雄は、組員一同が更生增產を誓つてから數年たつて、彼等の仕事がやうやく目立つてきた今日、大體一年間に彼らの示す必死の努力の結果を、次のやうな表にしてあらはすことを工夫した。彼は最初に組員各個人の米、麥、菜種の收穫高をグラフにして示した。次で「個人別御初穗並ニ保險金調査表」なるものを、これもやはりグラフにして圖示した。こゝで御初穗といふのは、もちろん天引貯金を指すのだ。だからこの圖表によれば、各個人が一年間に擧げ得た收益と、並にその年間にかけた保險金が明示され、グラフになつてゐるだけに、老幼婦女子にも自家の成績が一目して瞭然となる仕組だつた。小七郎や傳が、自家の經財狀態を衆目に曝したと云つて、不滿を示したのは、これの爲だつた。



吉村猛雄氏

それから猛雄は、これらの成績を發表し、すでに前に述べた通り、その優秀なる者には授賞する共進會を計畫し、これを毎年三月末に出來るだけ盛大にまた組員團欒のうちに開かうと思つた。

そのために、彼は更に詳細を極めた「綜合共進會成績表」といふものを作つて、組合員の生活の

あらゆる角度、道門から、綜合的にその努力を點數として表にあらはした。それによると、次の諸項目が擧げられてゐる。勤勞率、國策順應、裏作、米、堆肥、御初穗保險、出席、總點數、平均、氏名、といふ順序になつてゐる。

もつとも之は、貯蓄組合長で同時に隣組長を兼ねた彼が、夫々の觀點から調査して、それを點數に表はしたもので、勤勞率は、朝起、時間勵行、その他一切の勤勞の狀況によつて採點された。國策順應は、債券の講入、貯蓄高の狀況から判斷される。裏作、米はその收穫高、堆肥は金肥に代る節約の意味を含んで、その嵩の大さによつて評價された。御初穗についてはこゝではなか〳〵重要視され、その他で述べるまでもない。さうしてこれらは前に說明したし、保險については簡易保險凡てパーセンテージによつて表はされ、總點數と平均によつて、各個人の努力は、こゝに綜合して、これまた一目瞭然となるのである。

こんな調査は、組合長にとつても並にならぬ努力と骨折りを要するものであつた。殊に隣組長として多くの煩雜な事務はあり、更に農事實行組合を兼任する一方、一家の柱として老病の床に親しむ母を抱へ、二男二女の家庭を支へる爲に自ら耕農に從運する彼として、かゝる調査に要する人知れぬ努力は、實に容易ならぬものであつた。

こゝで一寸彼、吉村猛雄の人物について概略述べておかう。彼は明治卅二年大塚のその家に生れた。父は今より三十四五年前渡米、約十二三年間彼地で奮鬪したといふが、彼自身は、生れてから今日まで、一度もこの土地を離れたことなく、學齡に達して可也村小學校に入り、四ヶ年の義務教育を受けた後、前原町に出て、二ケ年高等科をおさめた以外に、何等の學歷もない。又特殊の勉學研究もした事がない。だから人物としては、極めて平凡、朴訥、何の奇もない人物に見えた。しかし、性來の率直な性格と、幼時から抱いた勤勞愛好の精神は、ひとたび立つて部落の運命を擔ひ、國を想つて國力の增進を念願してときにその燃ゆるやうな信念がやがて勇往邁進の氣魄を孕んで、倒るとも止まぬ勇猛心を彼の裡に掻き立てのであつた。

彼はあらゆる困難辛苦に、むしろ挑みかゝるやうな意氣を以て進んだ。またその勇氣の前には、克服されぬ困難は一つもなかつた。彼は、いかなる障害をものり越えて、堂々とその巨步を運んだ。最初こそ多少の不滿や反抗を示した人々も、彼のこの獻身的努力の前には完全にひれ伏した。彼等はこの素張らしい指導者を得て、いまは擧つて協力一心を誓ひ、女や子供の末に到るまで、大塚組合に住む幸福を知つたのであつた。かうした彼の、さうして彼等の眞劍な努力は、遂に數年を經て報はれて見事な實を結んだのであるが、いまそれを述べるに先つて、大塚貯蓄組合の昭和十六年度「綜合成績表」を掲げて、その實績を一覽しよう。

綜合共進會成績表

昭和十六年度

氏名	平均	總點數	出席	保衛初穂	肥推	米	農作	國旗奉掲	勤労奉仕
松尾矢助	九〇・五	六三・六	一〇〇	九三	九七	八一・〇	八三・六	九七	八四
吉村繁次郎	八八・〇	六一六・〇	八〇	九三	一〇〇	七三・五	九一・五	一〇〇	七九
吉村正實	九六・七	六七・一	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇・〇	九三・一	九八	八七
吉村小七郎	九〇・六	六三四・一	一〇〇	九六	一〇〇	七四・五	八三・六	一〇〇	八〇
吉村猛雄	八八・三	六一七・七	一〇〇	九八	八八	六九・五	八六・三	九〇	八六
檜崎榮雄	八九・三	六三五・一	一〇〇	九三	八〇	七三・八	八三・一	九五	八三
吉村樹重	八六・〇	六〇一・九	九五	九四	九九	六七・〇	八三・九	九五	八八
山本三郎	八九・三	六三五・六	九〇	九四	九八	七五・六	八五・六	九五	八六
松尾新七	九〇・〇	六三九・九	九〇	八八	八四・〇	八九・九	九三	九二	八六
吉村守	八一・〇	六三七・〇	八〇	九九	九九	一〇〇・〇	八一・〇	一〇〇	一〇〇
吉村置澄	九三・〇	六五〇・七	一〇〇	九六	一〇〇	七四・五	八七・三	九六	八一
吉村義雄	八八・三	六二八・五	九〇	九四	八〇	六五・〇	九五・五	一〇〇	八一

氏名	平均	總點數	出席	保衛初穂	肥推	米	農作	國旗奉掲	勤労奉仕
井島重吉	八八・八	六三一・〇	九四	九六	八二	八〇・〇	八四・〇	九七	八九
吉村八郎	九二・一	六五一・三	一〇〇	九六	九九	九三・五	八六・七	九二	八五
吉村能武次	八四・六	五九三・六	九五	八六	八〇	六六・〇	八六・六	七〇	八五
吉村勝美	八六・二	六〇五・〇	九〇	八四	八〇	六五・〇			
吉村傳	九三・三	六四六・〇	一〇〇	九六	八四	七〇・〇	八八・〇	一〇〇	八九
吉村惠	九一・三	六三九・五	八五	九六	九九	八六・〇	九三・五	一〇〇	八三
濱口末藏	八九・三	六三四・六	一〇〇	九三	九〇	六三・五	九四・一	九五	八〇
井島惠吉	九〇・〇	六一〇・〇	九〇	九〇					
小宮士二秀	八一・〇	六三一・〇	八〇	九三					
吉宮進	八八・五	六二八・四	九〇	九六	八六	六二・〇	八九・四		
山鹿健次	九八・〇	六一四・〇	一〇〇	九四					
庄島五郎	八三・五	五五一・四	九〇	九〇					

(六) 總理大臣表彰

昭和十七年九月廿日すぎの或る一日だつた。その日は、數日前この地方を見舞つた颱風で起つた、水害復舊工事のため、組合員は一同協力して、附近の堤防の修理に出てゐた。組合長の吉村猛雄も、そこに詰めて、色々の指圖や指導にあたつてゐた。

時刻はそろ〳〵午にまわらうとしてゐたが、その時、初の方から一人の黒い洋服を着た男が、小金丸の村道を一散に駈つてくるのが見えた。その男は、まもなく畑中にゐる猛雄を認めると、一層その駈足を早めて走つてきた。さうしし、やつと近くまでくると、肩でせい〳〵と息をしながら、勢ひ込んで呼びかけた。

「猛雄さん。猛雄さん。えらいこつになつたがあ——」

その聲で、猛雄が振返つてみると、それは意外にも現可也村長の井原亟佑氏だつた。井原氏は、どうしたものか、その日は沈着な氏の平常に似ず、ひどく周章てゝゐた。猛雄が無言のまゝ振りかへると、村長は畔道傳ひに猛雄の側まで寄つてきて、ぼんやりしてゐる猛雄の背中を、まづ、どん——とうつ敲いて

「えらいこつになつたんぢや——」

よく見ると、村長、よほど周章たとみえて、足につゝかけた靴の紐が解けたまゝだ。彼はまた無帽の額から吹き出す汗を、しきりに平手で拭ひながら、何から話出さうかと迷つてもぢ〳〵してゐる。

「えらいこつて、なんごとだすかいな」

猛雄が眞面くさつて訊ねると、井原氏は自分の周章てゝゐるのに、初めて氣付いたやうに

「さうたい、えらいこつだけぢや、わからんばいな、あつはつはつは……」

彼はこゝでまた、ひとしきり笑つて、やつと話をしてきかせた。しかし村長はなほも興奮してゐて、よけいなことにげら〳〵笑つたり、吃つたりしながら大風次のやうに話した。その話によれば、先刻、福岡縣廳から井原村長に電話があつて、我々の大塚貯蓄組合が、國民貯蓄功勞團體として、内閣總理大臣より表彰されることに決定した、といふのであつた。

「まつたく意外ぢやないか。このわれ〳〵のちつぽけな貯蓄組合が、天下數の隣組や組合の中から選び出されやうとは、まるで夢のやうな話ぢや。九州の、片田舎の、山ん中の一組合がな。それも、近年まで、近邊隨一の貧乏村で、首もまわらぬ借金部落だつたのぢやが、いつのまに、そんなに偉いもんになつたぢやらう。いづれにしても、こりや、なか〳〵のえらいこつですばい。あはは……」

村長は又しても體を搖つて笑つた。

しかしその笑ひと饒舌とを聞いてゐた猛雄は、よくみれば初めから、立つたまゝの姿勢を崩さなかつた。最初思はず、はつとして擧げた頭が、いつの間にか次第に垂れてしまつた。彼は、語も發せず、立つたまゝ、凝つと、眼を足元のくろ土に注いでゐた。

感慨無量だつた。ものも言へなかつたのだ。眼は足もとを瞶めてゐたが、じつはその眼に何も寫つてゐるのではなかつた。その眼から、危く迸り出さうな涙を、じつと怺へてゐた。頭の中には、また嵐のやうな感情が渦巻いてゐた。さうしてその嵐の中に、過去數年間に亘つて、それこそ血みどろな苦闘をつゞけてきた自分をはじめ、大塚組合の人々の闘ふ姿が、宛ら走馬燈のやうに、ひきついで現はれてくるのであつた。

あゝ、われ遂に勝てり——幾多の困苦の後の大勝利、大歡喜だつた。この深刻な歡びの情を、どうかして口に出して表はすことが出來やう。またその歡びが大きければ大きいほど、過去七年間になされた苦難の道が、更めて思ひ出された。あれを思ひ、これを想ひ、萬感交々胸に湧いて、その感極ると、涙が湧然とあふれ出てくるのであつた。

猛雄は若しも自分の前に、次の言葉を話しかける村長がゐなかつたならば、いつまでもその場に立ちつくして、夢見心地で泣きつゞけてゐたであらう。

しかし間もなく村長は、その夢見心地の猛雄を現實にひき戻すやうに、次の言葉をつゞけた。

「それでの猛雄さん。縣廳では、若しもあんたが在宅ならば、速刻振興課まで出頭して貰ひたいのぢやさうな。表彰式に參列のことや、その他の事で色々打合せしたいといふてな。役場でも、みんな大騒ぎぢや。どだい話がだしぬけで、晴天の霹靂のやうなもんぢやからな。縣廳へは、ともかく早う、一ときも早う、出頭したがよからう。わしも、自分の村の隣組が天下一の表彰を受けるちう、まるで降つて湧いたやうな仕合せに、茫となつて、なにはさて置き、まづ一刻も早うあんたに報告せにやならんと思ふて、いつさんに飛び出してきたんぢや。」

井原村長は、これだけ一息に喋りつゞけると、ふと我に返つたやうに自分の足もとを眺め、靴の紐のとけたのを引きずつて走つてきた周章加減に、我ながら可笑しくなり、その照れかくしに、思ひ出したやうにポケットから手巾を出して、もう一度額を拭いた。

「とにかくそんな按配ぢやから、あんたはこれからすぐ役場まで來てつかあされ。」

猛雄はこの際周章てゝ飛び出してきてくれた、村長の氣持もうしかつた。

「有難うござす——」

一歩進んで、その手を握つてやりたかつたところが、足が動かぬどころか、感謝の言葉も思ふやうに口から出てこなかつた。それで、自分の言ふべきことを言つてしまふと、こんどは直ちに踵

をめぐらして駈去つてゆく村長の後姿を、たゞ呆然と、まるで痴呆のやうに見送つてゐるに過ぎなかつた。

それから猛雄は、やつと我にかへつたやうに、徐ろに畑仕事の道具を擔いで家へ戻つた。手足を洗つて着替へをしてゐると

「なんごとな。どうしたとな。」

家で留守番をしてゐた老母が、不審さうな面もちで訊ねた。けれども彼は、それに對して明瞭な返事も與へず、まだ半ば夢から醒めぬやうな足どりで、再び家を出た。

役場へゆくと、なるほど大騒ぎだつた。井原村長はじめ、吏員一同が、手をとらんばかりにして彼を引つぱりあげ、彼のまわりを取巻いた。

「えらいこつちや。」

「お目出たう。」

「出かしたな——。」

皆が口々に祝辭を述べてくれた。

大塚組合の榮譽は、部落、一村の名譽、可也村は天下の可也村になり、糸島郡はその爲不滅の歴史の一頁き飾ることになる。なににしても目出度い。目出度い。

吉村組合長は、その足で直ちに前原町に出た。さうしてそこから福岡縣廳の振興課に出頭した。こゝでも、福岡縣の爲に氣を吐いてくれたと、散々の祝辭を受けた。

そこで彼は、丁度來合せてゐた、同じ表彰組で、これは大藏大臣賞を受ける、大牟田の氣吉虎雄に逢つた。彼等は、揃つて上京するやうに打合せをすることができた。

それから數日たつて、こんな歡喜と榮光とに包まれた人々を乘せた列車が、日本の各所から一齊に東京さして集つてきた。その人々は、九月卅日、新秋爽凉の氣滿ちた首相官邸で、曠古の榮譽を授けられたのであつた。

吉村猛雄は、かねて寫眞で馴染んでゐた東條首相の、溫情あふるゝ偉容をまのあたりに見、またその眞摯な聲咳に接して再び感激を新たにした。四十四歳の男の胸がうち震へ、おのづから眼頭が熱くなつた。殊に表彰狀を授與されて、その全文を首相が朗々と讀みあげられ、手づからこれを渡されたとき、思はず、ぐつ、と嗚咽が喉で鳴つた。各新聞寫眞班のたくフラッシュに眩み、よろめくやうに自席に戻るまでは、なんだか自分が自分でないやうな氣がした。その有樣はニュース映畫にも納められた。彼はそれらがすべて他人事で、自分はそれを映畫で見てゐるのだといふやうな錯覺を起した。

それから色々の人の祝辭があつて、榮えある一日が終つた。彼は、それまで手にしてゐた表彰狀

を更めて讀んだ。そこには次のやうに書かれてあつて、特に自分らの組合名が、痛いほど眼に燒きついた。

表彰狀

福岡縣　大塚國民貯蓄組合

戰勝完遂ノタメ國民貯蓄ノ增强ニ關シ協心戮力克ク報國ノ實ヲ擧ケ其成績洵ニ顯著ニシテ他ノ模範トスルニ足ル仍テ五百億貯蓄達成ヲ機トシ玆ニ之ヲ表彰ス

昭和十七年九月三十日

內閣總理大臣正三位勳一等功三級東條英機

(七) 貯蓄報國

昭和十七年十月廿五日。この日は大塚組合の人々にとつて、終生忘れることの出來ない日となるであらう。いや大塚組合廿四戸の子々孫々の裔に至るまで、永久に記念さるべき日となるであらう。なぜならば、この日こそ、彼等が艱難の末にうち克つた勝利に、心の底から醉つた日、また後世彼等の子孫にとつては、彼等の祖先が、榮光に充ち滿ちた歡喜の道標を自分等の土地に打込んで呉れた日であつたからだ。彼等の土地は、今後いかなる地理書にも、はつきりと示されるであらう。

大塚組合廿四戸の人々は、老も若きも、女も子供も、この日、大歡喜の祝宴を催した。と言つても誤解されては困る。彼等は決して大宴會を開いたのではない。ずでに多年の節儉に馴れた彼等は、極めてつゝましい手辨當の重詰めで自祝の宴を擧げたにすぎない。しかしその形が、どんなにつゝましいものであつたにしたところで、苦難の道を共に手をとり、勵んできた人々にとつてみれば、これはいかなる金殿玉樓中の宴に勝ること數倍のものであつたに違ひない。

この日、人々は、一日業を休んで隣組全員一人も洩れなく、組合長吉村猛雄の邸に集つた。その日は日曜日で、幸ひ秩晴だつたので、人々の心は、早朝から浮々してゐた。婦達の一部は來賓への

炊出しの仕事があつて、いち早く集り、賑やかな聲を立てゝ働いた。こんな場合、歡びを最も素直に現はすものは子供等だが、彼等は、この樂しい日を、軒端の雀と共に起き、自分等も雀になつたやうに躁ぎまわつた。狹い庭まわりを駈けめぐり、小舍の蔭や植込みの中で逐つかけたり、つかまへたり、跳んだり、はねたり、時には自分の母親のところへとんで行つて、後ろから小さな帶に獅噛みついて、母親の働を邪魔したり、自分らだけが歡びを知つてゐるんだ、といふ風な燥ぎ方だつた。

叫んだり喋つたりしてゐるのは、彼等の母達だつて同じだつた。彼女たちは、野菜を切つたり、魚を料理したり、水を掬んだり、火を燃したりしながら、盛んなお喋りの連發だつた。彼女たちは、もうすつかり上氣して、頰を赤らめ、聲を上づらせて、笑聲を振撒いてゐた。恐らく、彼女らが十數年來、感じたことのない有頂天だつたに違ひない。

人々は來賓と共に定刻の午後一時に集つてきた。組合長の家は座敷も庭も人でいつぱいになつた。座敷に上り切れないものは、前庭に莚を敷いたり、椽臺を上して、それ〴〵の位置に陣取つた。厩の馬も、この時ならぬ騒ぎが、歡びの集ひだと解るのか、これまたいともうれし氣に、しきりに嘶き、鼻を鳴らした。

一歩中口を出ると、その前面には一めんに實つた稻田がひろがつてゐる。それこそ黄金の波が起き伏すやうで、その上を秋日和の太陽が、暖い日光をさん〴〵と注いでゐる。蒼く澄んだ空には、流れる白雲も見えず、時折胡麻を撒いたやうに群りとんでゆく鳥は、渡り鳥でもあらうか。たゞ彼等だけが動く姿を見せてゐるだけで、あたりは、しんと靜まり返つてゐる秋のまひるだつた。

しかしそれは戸外のことで、一歩再び門を入ると、そこは話聲と笑聲との交響樂だつた。指揮者がないから、この音樂はどこまで發展するか見通しがつかない。最初にきまり通りの國民儀禮をやつた。それから、此度の表彰顚末の報告が組合長からあり、つゞいて村長、學校長や農會長或は部落會長の祝辭があり、また組合員の感想發表もなか〴〵立派にできた。

しかしそのあとは、もう大騒ぎだつた。なんどころではない。一刻も早く、この大歡喜の感激に醉はねば損だといふやうな有樣だつた。

酒もあつた。菓子もあつた。この日の爲に配給所が、特に苦心して集めてくれたものだ。酒好きの者は酒樽のそばへ集り、菓子のよい者は菓子盛りを圍む、といふ按配だつた。子供も、いつの間にかそれ〴〵兩手に何かを握つてゐる。婦人達も竈の前で、お握りを頰張る位ひは許して貰はねばならぬ。

「はじめの一年間が、いつち苦しかつたやな。」誰かゞ云つた。

「なんしろ働くことは一倍働いて、その收益は大さう天引されるちゆうので、なんだか間尺に合

はぬやうな氣がしての。」

「いや、二三年は確かに苦しかつた。こんなに天引貯蓄をやつて、食つてゆけるか、と思つたからな。」

「思つたどころか、じつさい食ふや食はずのことさへあつたやな。」

「そのむかつ腹もあつたんぢやろ、第一回の成績發表のときにも、小七郎がはらかいた。」

「さうさう。人の財産をぶちまけると云ふての。傳さんと一緒になつて怒りんしやつたばい。あはは……」

「あはは……」

居ないと思つてゐた小七郎が、すぐ側にゐた。彼はその言葉をきいて、振向くと、この一團の人の中へ割込んできた。さうして手に持つてゐた盃を誰かにさして云つた。

「おまへ達あ、わるいことを覺えてゐるのう。わしや、もう、あれからすつかり後悔しとつたんぢや。まつたく恥しいことを云つた、とわしや、あのとき、お寺の門を出るとすぐに悔んだ。なんちう餘計なことを云つたもんぢや、とな。かねてから向つ腹をたてる悪い癖があることは自分でも知つとつたが、あの時ほど自分の癖の悪いことが情なかつたことはなかつた。わしや、あれから後、傳さんにも幾度か話したんぢや。な、傳さん、あんたもこつち向きんしやれ。」

彼が言ふまでもなく、吉村傳は皆の後でにこ〳〵笑ひながら、自分の番を待つてゐた。彼は小七郎に呼ばれると、すぐまた仲間に割込んできて盃をまわした。

「さうぢや、さうぢや。わしや、もう濟んだことぢやから、後悔して、氣持を改めりやそれでえゝ、と何度も云つたけど、小七つあんつたら、いつまでも濟まなかつてな。」

「いや、荷にも、あんな氣持が少しでもあつては、協力致はでけん。結局自分だけが仲間外れになつてしまふぞと、あれからわしや眞劍になつて考へたものぢや。いつたい貧乏がなんで恥しい。恥しけりや、恥しくないやうに働きやえゝんぢや。こんな理屈が、あのときは、なんで解らんかつたらうかい。しかし、あれからお蔭で、わしや一生けんめいになつたぞい。自分では、他人樣の二倍も三倍も働いたつもりよ。またそのお蔭で、わしも他人樣並の暮しが出けるやうになつたが。」

小七郎は、そこで自分の前の冷えた盃をぐつと飲んで、もう一度話をつゞけた。

「あん時、わしの感心したことが一つある。そりや組合長の猛雄さんの氣持ぢや。わしがあんな無茶を云つたとき、その時は折よく猛雄さんは、その場にござらんかつた。しかし何れは猛雄さんの耳にも入つてゐるに違はん。それをな、猛雄さんは、なんにも云はず、知らぬ顏して、このお、おれとな……」こゝまで云ふと、小七郎は急に口を吃らせて、同時にボロ〳〵涙を流し出

した。

「こ、この、おれを、小七、小七、とゆうて、可愛がつてくれる……わしや、その氣持を、考へて、どんなにか、辛かつたぞよ。後悔せずに、をられよか……」

小七郎はほんたうに泣き出した。吸り上げて、絞るやうに泣き出した。それは酒も確かに作用してゐたが、やはりそれが小七郎の眞劍な氣持だつた。

「よか、よか、もうよか、おまへの氣持は、みんなにわかつとる。組長も偉いが、それほど眞劍になれたおまへも偉い。もうよか。こんな目出度い日に、涙なんか流す奴があるもんか。お前の云ふやうに、おれたちや、この組合のある限り、協力一心、どこまでも增產報國の一路を邁進するばかりぢや。」

その隣りに坐つてゐた吉村傳も眞情を漲らせて、小七郎の肩を撫でさすつた。

そのとき、一座の喧騷を壓して組合長の聲がひびいた。彼は座敷の正面に立ち上つて叫んだ。

「みなさん、お目出度う。今日といふ日は、なんといふ嬉しい日ぢやろか。どうか、大いに歡をつくして下さい。これといふのせ、みなさんが、この年月を眞劍になつて働いたためぢや。わしは、なんにも難しい理屈は知らぬから、たゞ働け働けの一點張りを通してきた。それをまた正直に受取つて、みなさんがいつしよけんめいに働いてくれた。その結果、こんな大きなよろこびが、わしらへところへ轉げ込んできたんぢや。そこで、まあ、一寸これを見ておくれ。」

彼はさう云つて、疊んであつた大きな用紙を擴げ、それを床わきの襖に張りつけた。人々の眼が、いつせいその方へ振向けられると、そこには次のやうな文字が書いてあつた。

國防献金醵出額表

一、百五十圓　組合　昭和十六年四月献金

一、三十六圓　主婦會　昭和十七年十月献金

一、七百圓　組合醵出　昭和十七年十月献金

人々は思はず、あつ、と驚きの聲を擧げやうとした。それを手繰り寄せるやうにして、猛雄は再び言葉を繼いだ。

「これはわしが、昨年からまだ發表しなかつた分ぢや。初めの百十五圓は昨年四月の分ぢやが、本年になつてこの十月初め、本組合の主婦會から三十六圓の献金があつた。これは本年に入つて起工した隣接部落の溜池工事に、本組合の主婦會が加勢して得た報酬を献金したもので、まつたく貴

い汗の結晶とも云ふべきぢや。それから、最後のこれを見てくれ。これこそ、わしらが、わしらの信念を最も適確に表はしたものなのぢや。すなはち、増産貯蓄本來の主旨を、はつきり示したものと云つてよいのぢや。しかし説明せんではわからんから、わしが掻いつまんで話をしてみるとかうぢや。」

さう云つて猛雄は、ぐつと一いき息呑んだ。

「この九月、わしらは榮譽ある總理大臣賞を戴くと、わしは直ちに、かう思つた。——賞は戴いたが、こりや戴き放しにしてをけないぞ——となな。つまり、なんぢや。わしらは増産貯蓄でその實を擧げた。が、しかし、その氣持を一歩退つて考へてみると、まだ〳〵どうして、そこには、我々自分の貯蓄、我々組合の利殖といふ考へが多分にある。なるほど我々個人の、また我々組合の貯蓄も、すべてはお上の爲にならう。それでも貯蓄の目的は充分に達しるてる筈ぢや。しかし、わしには、この目的を、もつと、積極的に示したいといふ氣持が多分に動いた。それが、このたび七百圓を組合から醸出するといふ献金になつたのぢや。わしは、これでわしらの貯蓄の目的が、いつさう明瞭になつたと思ふが、これはみんなも同じに考へてくれるに相違ないと思ふ。わしらは、どこまでも、お國のために増産し貯蓄してゐるのだといふことを忘れてはならぬのぢや。

こゝまで云ふと、人々は一せいに手を拍いて

「賛成、賛成。」

といふ聲がわき起つた。さうしてその思ひつきを欣ぶ聲は、やがて座敷にも庭にも、この屋敷中に充ちあふれ、やがて組合長吉村猛雄が發聲する萬歳三唱で、やつと納まつたのであつた。

天皇陛下　萬歳——

大日本帝國　萬歳——

大塚國民貯蓄組合　萬歳——

五百億突破國民貯蓄功勞團體表彰內申（抜萃）

組合名　福岡縣糸島郡可也村大字小金丸大塚國民貯蓄組合

組合長　農業　吉村猛雄

設立年月日　昭和十年二月十一日

組織及貯蓄方法

一、組織——組合長——隣組長——理事及監事　四名、組合員　二十四名

二、貯蓄方法——産業組合預入、國債債券ノ購入

昭和十七年三月末ノ組合員數及貯蓄額

一、組合員數　二四人

一、貯蓄額　七三、二五六圓

內國債——一、五五〇圓　貯蓄債券——六六七圓　報國債券——三三五圓

其他計——二、五五二圓

組合員一人當貯蓄額　三、〇五二圓三三錢

最高最低貯蓄額

最高　六、九六〇圓

最低　二〇九圓

事績概況及特色

一　本組合ノ概況

本組合ハ人口一四七名ニシテ農業二〇戶商業一戶國民學校教員外俸給生活者三戶計二四戶ヲ以テ組織セリ

組合員ハ各々相當ノ資產ヲ有シ、田、自作二三町一反、小作五町八反、畑作九町六反、小作二町ヲ耕作セリ、此ノ反別ハ戶當リ耕作反別二町餘リニシテ年間二、一〇〇圓程度ヲ擧ゲツツ

アリ

二　特色

(1)　貯蓄ノ動機

本村ハ郡內最多額ノ負債ヲ有シタルタメ之ガ更生策トシテ村當局ハ昭和八年八月ヨリ早起勤勉以テ農產物ノ大增收ニ努メ、以來米、麥、菜種ノ主要作物ハ勿論、蔬菜、果樹ノ副業收入ニ至ル迄一定ノ天引貯金ヲナス樣村民ニ之ヲ圖リ其ノ申合ヲナシタル處率先之ニ參加シタルモノナリ

(2)　捻出ノ方法

(イ)　御初穗貯金ハ本部落貯金ノ大部分ヲ占メ農產物出荷ノ際產業組合ニ於テ別紙ノ通リ率ニ依リ天引貯金ヲナシ殘額ヲ各個人ニ支拂ヒ產業組合ヲ經過セザルモノハ總テ收入ノ二割ニ相當スル額ヲ納額通知書（別紙）ニ依リ納入セシムルモノニシテ本貯金ハ每年四月ニ行ヘレル部落綜合共進會（各個人別ノ勤勞貯蓄、農產物增收、朝起時間勵行、國策順應、裏作、米、堆肥、常會出席、御初穗保險等ヲ隣組長ニ於テ夫々ノ觀點ヨリ調査シ之ヲ點數ニテ表シ平均點ヲ出シ各自ノ優劣ヲ發表スルノ會）ニ於テ其ノ成績ヲ發表シ過去一ケ年ヲ反省シ各自ノ自彊ト發奮ヲ促シツツアリ

(ロ) 收入ノ大部分ヲ貯蓄ニ振向ケルタメ必要經費ノ減少ニ努メ施肥ノ改善金肥ノ使用減少、自給肥料增加等ヲ計リ以テ支出ノ減少ヲ計リタリ

(ハ) 勤勞ノ倍加 (略)

(ニ) 生活ノ刷新 (略)

三 事績ノ概要

(1) 國民貯蓄額ノ目標額突破狀況

年度	目標額	實績
昭和十三年	四、六五〇	一九、〇四八
〃 十四年	四、六五〇	六、二一〇
〃 十五年	七、三〇〇	二三、六九一
〃 十六年	八、二〇〇	二四、三〇七
計		七三、二五六

(2) 其ノ他ノ貯金

(イ) 報國貯金 一、八三一圓七二錢

(ロ) 定期貯金 四三、四八九圓五五錢

(ハ) 御大典記念貯金 六、一七八圓六二錢

(ニ) 家族五ケ年据置貯金 三、一九二圓五二錢

(ホ) 自作農償還準備貯金 四一九圓三五錢

(3) 部落民貯金總額

國民貯蓄	七三、二五六圓〇〇錢
任意貯金	五五、一一一圓七六錢
計	一二八、三六七圓七六錢
右一戸當	五、三四八圓六五錢

四 組合法上ノ整備狀況

(1) 現況報告書ノ提出極メテ好成績ナリ

(2) 諸帳簿ノ整理亦良好ナリ

(3) 國民貯蓄ニ關シテハ引出者ヲ認メズ

(4) 國債類ハ之ヲ郵便局ニ保管ヲ委託セリ

街の中にて

(一)

久留米市明治通三丁目西隣組國民貯蓄組合

昭和十七年十二月某日、さきに模範組合として榮ある大藏大臣賞を授けられた久留米市莊島町第二町内會明治通三丁目西隣組國民貯蓄組合の實情を見聞のため、筆者は組合長重富林吾氏方を訪れた。

久留米驛から蜿蜒遙かに伸びたアスファルトの大道——以前は電車が通つてゐたのだが、筑後軌道の廢線後も市内市外をつないで遠く日田方面までつゞくバスの通路となつてゐる大道の、驛より四五町の所に重富氏の店舖はある。

八疊ほどの疊敷の、向つて左に、ずらりと並んだ數十挺の弓、その裏側の、影になつた一室では職人らしい若い男が餘念なく仕事をしてゐる。鍵の手になつたさして廣くもない店土間に立つと、正面の鴨居に掲げられてゐる三枚の額の一つ——大藏大臣の表彰狀が先づ眼を射る。他の二枚は、營業の弓具に關する名譽を語る類のものである。

五十臺であらう、身の丈も肉付きも普通よりは小柄な、半白の髭のもじやもじやと伸びた、一見平凡な格幅ながら、少し眼をとめて見ると、眼光こと〳〵のほか鋭々として、どことなく精悍なかんじの溢れてゐる重富氏は、店先の瀬戸火鉢の傍に座蒲團を敷いて筆者にすゝめた。座敷などへ招じられても、辭退するつもりだつた筆者には却つて幸ひであつたが、店先での對談は筆者に限つたことでなく、實に重富氏の萬人へ共通に適用される一種の家風であるといふことを、やがて筆者は知ることができた。無用の時間と、無用の手數を省くための氏の生活信條から割出されたところであり、重要な要談以外の應對は、相手の諒解を求めて仕事の傍らにさせて貰ふことにしてゐる、といふことである。自己の職域への忠實なる勤勞——働くといふことを最大の倫理として生きる重富氏の面目は、生活樣式のはしばしにまで現はれてゐるのだ。しかも氏は何よりも實行の人であり、自己の信念はそのまゝ實踐に移さずにはゐられない質にちがひない。

「大藏大臣賞など受けまして、實に意外でもあり、恐縮に思つております。何も特別におほめに預るやうなことをした譯でもありませず、まあ銃後の國民として當然なさねばならぬことを行つてゐるまでです。」

開口一番、氏は謙遜してさう言つたが、話がぼつぼつ進むと、不拔の信念と、實踐躬行の片鱗が語調に籠つてくる。雄辯ではないが、言はんとすることは適確に述べていく力強い話しぶりだ。

「とりたてて申上げるやうな珍しいお話なんかありません。貯蓄の祕訣といつたら、結局、勤勞によつて收入の增加をはかることと、經費を節約すること以外にはないでせう。この二つより外に方法のあらう筈はない、たゞ問題はそれをどの程度實行するかといふ點だけです。私が組長をやらせて頂いておるこの隣組の人たちは、みんな實によく働きます。何といつても働くことが第一で、稼ぐに追ひつく貧乏なしですよ。」

勤勞と節約よりほかに貯蓄の祕訣はない——然り、まことにこの平凡なる常識以外に何の方法もないにちがひない。奇想天外の話、驚くべき綺譚のあらう道理はないのだ。問題はただ「實行」の如何である。さうして常住不斷の實行の中にこそ、實に「驚くべき」ことが含まれてゐるであらう。

弓具商一、馬具商一、古物商一、釀造具販賣業一、藥店一、果實商一、ミシン販賣業一、兒童乘物販賣業一、醫師一、撞球場一、（これは細君の副業で主人は會社員）與信所一、會社員三、等隣組員の職業は多種多樣に亘つてゐるが、二三を除いては決して所謂「資產家」といふほどの家庭はない。いはば「勤勞階級」であるが、朝は一時間早くから、夕は二時間遲くまでの勤勞を、率先身を以て示した重富氏を始め今ではどの家でも實行し、「みんな實によく働いた」結果は、次のごとき數字となつて現はれたのである。

昭年十七年三月現在

組合員數　二十三名

貯蓄額　二萬四千二百四十七圓

一人當り　一千五十四圓二十錢

最高　七千六百八十圓

最低　百三十一圓

「他人よりたくさん働くこと、これが貯蓄の第一義だと思ひます。會社勤めの方などは、われわれのやうな職業とはちがふやうですが、結局は同じなのです。他人より多く働けば、その努力は認められぬ譯はない。必ず他人より以上に昇給します。昇給すれば餘裕ができて貯蓄も殖える。會社員も商賣人も同じですよ。」

平凡の如くして卓拔なる重富氏の勤勞哲學である。

既出の數字はもとより「貯蓄組合」關係だけの貯蓄の數字であり、實際にはこれ以上種々の機關と方法による貯蓄が他にもされてゐるのだ。勤勞のもたらす恐るべき底力ではないか。では各戸の收入に對する貯蓄の比率はどのくらゐだらうかといふ筆者の問に答へて、貯蓄組合關係の貯蓄だけについてみれば約二割五分ぐらゐかと思ふ、との重富氏の言であつた。

「私個人としては、早くから貯蓄といふことを心がけて實踐してきました。しかし現在の時局に面しては、貯蓄といふことはもう個人の、一家の安泰のみの問題ではなくなつてきました。いはば銃後國民の義務です。貯蓄の問題はそのまま戰爭完遂の成否にもつながるほどの重大問題であることは、無學なわれわれにも判ることです。これは支那事變當時からすでにかんじてゐたことですが、だから私は例の一錢貯蓄といふのが始つた頃から、町內會で貯蓄の增進に努めることを提唱してきました。」

重富氏の勤勞哲學・貯蓄哲學は、今や明確なる國家意識にまで高められてゐるのだ。しかもここにおいても亦言ふは易く行ふは難しで、戰時下貯蓄の役割の重要さは誰にでも判つてゐても、要は實行である。百の理論よりも一の實行が今日ほど尊ばれなければならぬ時代は稀であり、而して實行力といふものはとつてつけたやうに身につけ得るものではない。宜なる哉、重富林吾氏は獨力よく今日を築いた立志傳中の人物であり、且つその生活の歷史のなかには數多くの教訓が含まれてゐるのである。

(二)

明治末年のことである。

浮羽郡千年村の農家に生れた林吾は、思ふところあつて新妻を實家に預けて京都へ上つた。弓具製造の職人としての技を習得するためであつた。――普通の人の着目すべくもない、そんな異色ある仕事に志を立てたのには多少の動機がないでもなかつた。新妻の父某が弓道師範だつたのだ。引き絞つた弦を切つて放つ修練の業を眺める機會を持つた林吾は、そこに日本武士道の精華を感得するとともに、國民體育の具として弓道の普及こそは最も當を得たものであると信じた。「よし！おれは弓の道具を造る人間になるのだ！」思ひ立つたらあとへは引かぬ一徹さは、彼の持つて生れた性情である。手職の修業に志を立てる青年たちはあつても、この仕事を選ぶ者はないだらうことも、却つて彼の勇氣を奮ひ立たせるに役立つた。競爭者の尠い仕事だけに、腕次第では事業としても有望だと思はれた。

「おまへがさういふ氣なら本場に行つて修業して來い。おれが然るべき弓具師に紹介してやる。しかし修業中は足手まとひがあつては本氣にやれんじやらう。娘はおれが預つといてやるから、一日も早くいつぱしの腕を鍛えて來るんじや。」

妻の父親はさう林吾を勵ました。

數年の後、一意專心仕事を研めて、一人前の技を身につけた林吾は九州へ歸つてくると、二十五圓の金をふところにして、久留米に居を構へた。鄕家には多少の產もあつたけれど、親の財產をもとでに成り上げるごときは彼の潔しとせぬところであつた。

妻とともに、一ケ月二圓五十錢の間借に起臥しながら、毎日朝は五時に起き、夜は十二時まで弓を造つた。販路は遠方の町村にもあつたが、彼は十里ある所にでも、夜をかけて歩いて行つた。歸りには鷄鳴を聞くこともあつたが、そんなときも、まどろむ間もなく五時に起きて、仕事を始めた。勤勉――努力、眞面目に働くといふことへの信仰に似た一念は、すでにその頃から彼の心に培はれてゐたのである。同時に、貯蓄といふことへの關心も亦その頃から彼は持つてゐた。三年間に五百圓といふ貯蓄の目標を彼は立てた。

しかしながら、この計畫はさう簡單には實現できなかつた。二十五圓の資本で、しばしば質屋に出入りしながら經營する商賣によつて、當時の金五百圓といふのは容易ならぬ額である。しかもその間、他人から迷惑を及ぼされたりしたこともあつて、目標額はいくたびも挫折した。けれども彼は屈せず、勤勉努力を信條に、一日一日を働きつゞけた。

久留米に業を始めたのは、大正二年、林吾二十五歳のときであつたが、半年後、漸く二圓五十錢の間借を引拂ひ、さゝやかながら一軒の家を持つに到つた。それが現在の、莊島町の一角である が、その頃はまだ勿論現今の家屋ではなく、小さな建物であつた。隣家の三軒（?）を合せて彼自身の持地持家となつたのは本年（昭和十七年）の二月であるが、彼の店舖がほぼ現在の形を備へた

のは相當以前で、彼の並々ならぬ働きぶりに感激した家主が、彼の希望通りの家に改築してやらうと言ひだしたのであつた。長い弓を並べるには何よりも天井の高い家でありたいと、彼はそれを希望の第一として家主の厚意に甘えた。太い梁もあらはな、がつちり組まれた、普通よりもかなり高い天井を彼の店は持つてゐる。

歐洲大戰を契機とする好況の波は、津々浦々まで押寄せ、俄か分限や一夜成金が續々と現はれたが、好景氣によつて多少の需要は增したにせよ、弓具製作といふ仕事はその性質上濡手に粟のやうなことのあらう筈はなかつた。けれども林吾はかれこれ迷ふことなく、自らの懷ろを見越して製品の利を多く貪るやうなことは全くせず、材料代に勞銀を加へた豫定の價格に終始した。他人の製品よりすぐれた品を、他人の製品より安價に賣ることが、商賣繁昌成功の基だと彼は考へてゐた。他人が一時間でする仕事を彼は五十分でやることによつて製品の數を增さうとは決してしない。むしろ他人が一時間でやる仕事を一時十分間にやることを心掛け。それだけ念を入れれば製品は必ず丈夫で優秀である。製品の數を增すことは、他人が八時間働くのを十時間、或は十二時間働くことによつて達しやうといふのだ。

「重富の弓は品がよくて値が安いぞ。」

かげでもさう言つてくれる人がしだいに多くなつた。

渡る世間に鬼はなし、正直に信念を持つた仕事さへしてゐれば、必ずや誠心は天にも人にも通じ、期せずして報ゐらるるものだといふのが重富哲學の不變の信條の一つなのである。

大正六年、林吾は杵島炭坑に出張し始めた。そこの職員たちの間に特に大弓熱が昂り、註文は頗る多量に上つた。

出來上つた品を持つて行き、更に註文を取つて歸るまでの二日間三日間に對して、日當二圓づつをやらうと炭坑の上司が言ひだした。商取引のための出張に、需要者側から日當を拂ふなどといふのは破天荒のことにちがひない。

「君のやうに、薄利で確實な品を持つてきてくれれば、こつちもそれに報ゐなければ嘘だよ。遠慮せずに、やるものは貰ひたまへ。」

相手の言葉に林吾はありがたく受けることにした。

正に、誠心人に通じたのである。

林吾の營業はその頃からだんだん軌道に乘り始め、宿望の「三ケ年に五百圓」の貯蓄も現實に實を結び、一朝さうなると、計畫よりも結果の方が更に好調となつて現はれた。

大正八年、彼は八幡の製鐵所へも出張し始めた。

そこは以前から數名の同業者が出入りし、かなり多額の需要層があつたのだが、彼が行きだして

しばらくの後には、もはや他の人々はいつしか顔を見せなくなり、彼の一人舞臺と化した。品が良くて値が安いといふ彼の生産方針が、他を壓倒してしまつたのである。

彼はここでも誠心通じて破格の待遇をうけた。さういふ方面を司る「公餘倶樂部」から出張毎の汽車賃と宿泊料を支給されるのだ。

かくして林吾の希望は徐々に報ゐられていつた。

(三)

裸一貫から産をなした者には、往々にして、義理も人情も踏越えて只管錢を守ることにのみ汲々たる人間がある。親戚はもとより、兄弟姉妹の難儀をも他所に見て、おのれ一個の保身にばかり熱中する類の者である。重富林吾の勤儉貯蓄がそのやうな我利々々亡者的それとは自らその選を異にすることは、次の一事を以ても明瞭である。

彼は妻との間に子寶に恵まれなかつた。しかも現在でも家族十二名、嘗ては十七八名に達してゐた時もあつたといふ。養子とその妻はむろんのことながら、従弟とか甥とか姪とか多くの者を世話し、更にそれらの人々の配偶者や子供たちまで同居してゐる。

それらの人々は子供の外皆職を持つて働いてゐる。一戸を構へれば構へられぬ人々ではないのだが、林吾の大家族主義によつて一つ屋根の下に生活してゐるのである。

林吾の大家族主義には貯蓄につながる信念が加味されてゐる。即ち、三軒の世帶を持てば一軒百圓づつ生活費が要ると三百圓、もしそれが一軒でくらせば二百圓ですむ。少くとも家賃その他目に見える經費だけでもそのくらゐの差はあるだらう。店舗を必要とする職業ならやむを得ぬが、會社勤めや手職の者は、むしろ大人數同居してゐる方が相扶け合つて便利でさへある。そこから生ずる經費の輕減をもつて貯蓄にふり向ければ、正に一擧兩得ではないか。——重富哲學の一端である。

それらの從弟や甥のうち、現在、一人は兵隊となり、三人は徴用されてゐるのだが、直接君國に報じてゐる人々に對して、然らざる人々の赤心は、いふまでもなく、職能によるそれぞれの意味での增產であり、又、貯蓄による戰費の充實でなければならぬ。——「貯蓄はもう個人だけの問題でなく國家の問題である」といふ自覺に到達した林吾は、自ら範を示しつゝ、起つて隣組を率ゐる決心にまで高められたのであつたが、それ以前から、彼は自分の一家や店を中心とした一種の貯蓄組合的な營みをつゞけてゐた。讀者よ驚く勿れ！重富一家の大家族は嬰兒にいたるまで一人殘らず貯金通帳を持たぬ者なく、更に驚く勿れ！たとへ通勤者たりともここの店に働く職人たちの悉くがそれを持ち、貯金通帳を持たぬ者はこの店に働くことを拒むのである。その鐵則はすでに十二三年前から確立されてゐた。貯蓄が國民の義務だといふ實感が夙に

林吾の心中に養はれてゐたのだつた。

彼が舊制度における「町總代」に就任してからもう十三年ばかりになる。制度革まつて後は「隣組長」となつた譯であるが、「人間の義務」は同時に「國民の義務」だと痛感され始めると、それまでは自分と自分の周圍によつて營んでゐた貯蓄道を、隣組全體——ひいては國民全體に向つて叫びかけねばゐられぬ情熱に驅られ始めた。自己の信念がそのまま國家の要請に合致した故である。

昭和十三年十月、一日一錢、月額三十錢の所謂一錢貯蓄が、林吾が總代を勤める町内の居住者二十九名によつて開始された。

「一錢ではあんまり少い。收入や資力に應じて口數をできるだけたくさん持つて行かうではありませんか。」

林吾の提案によつて、十口、二十口と持つ人が生れ、毎月の貯蓄額はしだいに上昇した。

やがて町内の申合せとして三つの事項が可決された。

その第一。——敬神思想の涵養。必ずしも暇を缺いて何々神社にまで參拜に行くには及ばぬ、めいめいの家庭に祭る神佛に、起床直に禮拜を怠るまじきこと。

その第二。——勤勞の强化。朝一時間、夜二時間を餘分に働きませう。

その第三。——節儉。無用の冗費は一切省きませう。

さうして第二と第三の成果はこれを貯蓄の增額へ。

總代重富林吾の發案である。

十五年四月には、更に毎月の貯蓄額を增額し、十六年九月、法規による「貯蓄組合」を組織する頃には、隣組となつた組合員全體の氣組が、もはや一體となつて貯蓄の道にふり向けられてゐた。具體的な貯蓄增强方法が討議研究されるとともに、消費節約の根源たる「生活の刷新」が企てられた。

先づ實行に移されたのは、「冠婚葬祭の改善」である。

入營、結婚、出產等は祝事を廢止、配物一切を中止と決つた。入營・出征に際しては一戸三十錢宛を醵出して、返禮は絶對廢止。葬儀は一戸五十錢、香典返しや飮食の廢止。

以上の刷新によつて生ずる經費の相當額はそのまま貯蓄へ——。

「國民の義務」といふ意識にまで高められた林吾の貯蓄奬勵は、今や隣組員一致の意識となり、貯蓄報國、貯蓄戰士の自覺の下に協力の實を擧げてゐるが、特に組合長林吾を扶けて、貯蓄戰の片腕ともなつてゐるのは、帝國興信所支所長たる和田虎治氏である。

「手を組んで貯蓄報國へ」の意氣冲天のこの組合では、町内會聯合會等からの割當目標額が少なすぎるといふ、いとも朗かな不平が起る。

昭和十六年度における目標割當は三千圓であつたが、これを四千七百圓に値上した。

最近始まつた、婦人會の貯金は月額一圓から出發したものの、忽ちにして我も我もと增額を申出で、現在では月四十數圓、耳を揃へて郵便局へ。

足並揃つて一人の不平者もなく、隣組常會での異論も全くない。

收入に應じて、無理な所へ無理な相談はせぬのだ。さういふことをしなくても、できる所から自發的に增額する。

「何だかだと理窟を言ふたり、影口や井戸端會議の暇があつたらその分働くこと。みんながさういふ氣ですから不平も異論もありませんよ。」

組合長兼隣組長會心の辯である。

(四)

「あなたがこの卸商賣を始められて後、弓道といふものはだんだん普及發展しましたか?」

すらりと並んだ弓具を眺めながら筆者は重富氏に訊いた。

「目覺しい進展といふほどのことはないやうですが、まあこの道は絶えぬと思ひます。」

つゝましい中にも自信ある答だつた。

「久留米にはこの御商賣は外にもあるのですか?」

「以前はほかに二三軒ありましたが今では私のとこ一軒になりました。私は別に商賣敵としてぶつぶさうなどとは思ひはしませんでしたが、自然さうなつてしまつたのです。やつぱり良い品を安く賣る、精出して働くといふことが、そんな結果を產んだのでせう。製鐵所に行つてゐましたときに到頭私の一人舞臺になつたのと同じなんですな。」

「販路は現在どんな筋ですか?主に卸ですか?」

「以前は殆んど小賣主でしたが、この頃は卸の方が殖えたかたちです。取引先は全國的です。」

しかし、と重富氏は仔細らしい表情を浮べ、商賣といふ點からいへば、この商賣はいはばたかの知れたものだと言ふのだ。

現在、全國にある弓具商は三百數十軒、その製品の生產額は年百萬圓には滿たぬ。しかも他の商品に比すれば、値段の騰貴率が甚だ低く、利益は割に薄い。

「決して有利な商賣じやありません。私が今日あるのはただ働き通してきたことの賜物です。でも、働きさへすれば少々不利な仕事でも結構貯金ぐらゐはできるといふことの見本にはなるでせう。何といふても働くことが一番ですよ。」

奥からばたばたと足音が亂れて、十歳內外の幼女たちが三四人駈け出してきて土間に降り立つ

た。養子といふ人の子供たち——林吾氏の孫に當る人たちででもあらう、と筆者は想像した。

「何か御趣味といふやうなものは？」

「別にありませんが、まあ趣味といへば子供を育てることでせうか。孫だとか、甥の子だとか、從弟の子だとか、いろいろ育ててゐますが、二日でも自分の手につけるともう放したくないもので す。可愛くて……。」

重富林吾氏

「御實子が欲しいとお思ひになりませんか？」

「持つた經驗がないから特に欲しいとも感じません。自分の子であつてもなかつても、手につけておれば可愛いいものです。私はどの子供でもおんなじやうに愛情をかんじます。」

重富氏は苦味走つて顏をほころばせて、幼女たちの方に眼を走らせる。

「お若い頃からのことで、何か特に思ひ出となつて殘るといふ風な體驗談、或は御感想といふやうなものは？」

「申上げるほどのこともありませんが、商賣を始めてから長い間私は殆んど汽車や電車に乘らなかつたもので、大牟田に行くにも、田舍の方に出かけるにもてくてく歩きました。以前は筑後軌道があつたのですが、鄕里に歸るのにも私は決して乘りませんでした。しばらくしてやうやう自轉車を

一臺買ひまして、それからはそれを利用しましたが、汽車電車にはできるだけ乘らないのは近來でも同じです。八幡あたりにでも自轉車で飛ばしました。働くことと儉約することよりほかに貯蓄の秘訣はないといふことは何べんも申上げた通りですが、働くことにしても、儉約の方にしましても、他人並のことをしておると思ふ位では實は他人に劣つてゐるのでして、他人の倍も三倍も働いておる、儉約しておる、と思つてやうやう他人より幾分進んでおる程度だらうと思ひます。それから、これは數字の上では矛盾した話かも知れませんが、ひとつ內緖話をしませう……。」

さう前提して、重富氏の語るところによれば、氏の貯蓄の道が漸く緖についたころ、商賣の運轉資金が足りないやうなときでも氏は決して貯金をおろさずに、その貯金通帳を抵當に利のつく金を借りた、といふのである。しかも氏は金利の少しでも安い所を選ばうとはせず、むしろ利の高いことをすら希望した。貯金の利息の何倍もの高利の金を借りても貯金を引出さぬといふことは、數理の上では勿論大不利益である。それを敢てする重富氏の所信はこうだ。——自分の貯金を引出したらふたたびそれをもと通りに預けるといふここはなかなか至難である。ずるずるにそのまゝになるおそれがある。ところが利のつく金を借りてゐれば、期限內に返濟するためにいやでも努力しなければならぬ。利息が高ければ高いほど一刻も早く返さねばといふ氣になる。結局それだけ緊張して働く——。机上の理論でなくて現實の人情から割出した實際主義である。數理には反しても、現實

に根をおろしたこういふ行き方に、重富氏は自ら固い信念をすら抱いてゐるのだ。

「あなた方がお聞きになつたら理窟に合はんとお考へになるかも知れませんが、世の中のことは、とかく理窟だけでは駄目だと私は考へております。私は自分が無學だからいふのではありませんが、あまり學問をされて理窟を言はれる方は、ああでもない、こうでもない、で却つて理窟倒れで實行力が乏しい人が多いです。」

筆者にはいささか耳の痛い話ながら、これは事實であり、同時に、文學などやつてゐる者の往々陥り勝ちな必要以上の懐疑的思念への痛棒として、再思三省を要する問題に觸れてゐる。理論よりも信念、さうしてその信念から生れる實踐、——世の中を動かし、歴史を創造してゐるものは、むしろさういふものではなからうか。

「内緒話のついでにもう一つ……。」

重富氏はだんだん胸襟をひらいて語りだす。

貯蓄が國民の義務だといふ觀念にまで盛上つてきた今日から振返ると、甚だ恥しい話だが、最初のうちはやはり自らの老後や一家の將來のために始めた貯蓄であつた、と氏は告白するのである。

「始めの理想は一萬圓でした。」

一萬圓貯金するまでは寢食を忘れて働くのだ、と氏は内心深く期するところがあつた譯である。

貯金の最も困難だつたのは最初の五百圓實現までで、それからはおのづと道がひらけ、やがて宿望の一萬圓に達したが、氏がそれを念願した頃と實現した頃とでは世の事情が一變してゐた。同じ一萬圓と名はついても實質は大にちがつてゐたのだ。物價は上り、金利はその割に安い。一萬圓では、自分の老後、一家の將來の安泰は期すべくもない。

「次には五十まで働き通す覺悟でした。」

氏が五十歳になり、貯金は遙に增額したけれど、同時に經濟界の實情は更に進展してゐた。

「到頭死ぬまで働き通す決心をつけました。いくら貯金ができたらとか、いくつになつたらとか、そんなことを目標にして、安逸をむさぼる日を待つやうな氣持は頭から間違つてゐる、人間は身體が丈夫なかぎり働かねばならぬやうにできておるのです。」

(五)

さういふ思ひ出話や、信念と實踐に關する感想などを、氏は時折、銀行の支店長あたりに洩すと、先方では氏の話を聞きたがつて、無理に應接室へ引上げられたりするといふ。又、貯蓄銀行の勸誘員などがやつてくると、主客顚倒して、相手が氏から教へられ、非常に參考になつたと禮を言はれるといふ。

折から、でつぷり肥つた中年すぎの女性が店先に現はれた。

「七圓五十錢の分がお宅にありましたら、二枚代へていただけませんか。」

風呂敷包をといてとり出したのは、債券である。十五圓のを、七圓五十錢二枚と代へて欲しいといふのだ。

重富氏は立上つて奥へ入つたが、しばらくすると債券を持つてきて、相手の希望通り代へてやつてから、筆者へ話しかけた。

「實は今朝、債券の割當を受けたのですが、忽ち消化しつくして足りないもんだから、私と和田さん池田さん、それにこの方と四人は買つてないのです。あとで追加申込をします。」

割當額は千百九十圓、半日のうちに賣り盡して四人分足りぬといふのである。目前、この隣組の實情を見せられ、重富氏の話にいささかの嘘いつはりもないことを確かめる機會に惠まれた譯だ。

「實にみなよく買つてくれますので、世話なしです。」

本年中の國債其他債券類の購入高は、この千百九十圓を合すると五千三百圓ほどになり、外に婦人會でも若干買つた、と重富氏は說明する。個人でこれ以外に買つてゐる人は勿論あるので。

「ほんとにみなさん二つ返事でお買ひになるんですよ。今日もすぐなくなつてしまひましたんで、今あちらの隣組の方の御加勢をしてゐるところです。」

婦人は筆者にさう言ひ、それから重富氏と個々の購買先のことについて二三話して辭し去つた。

「あの人は全くよく世話してくれます。債券なんかのときは一人で持つて廻つて、この隣組だけではなくて、同町内のほかの組まであして廻つておられるのです。」

「何といふ方ですか?」

筆者の問に答へて重富氏の言ふところでは、この婦人は永島といふ姓で本年五十九歳、醫師だつた夫は先年他界して未亡人である。子供は三人あるが、長男は陸軍中尉として出征中、二男はまだ醫專の學生、すそは女兒だ。子供たちのために夫君の歿後苦闘してきて、現在ではさしたる收入の途もないのだが、それでも毎月の貯蓄もし、國債なども少額ながら自發的に買つてゐる。しかし多額の貯蓄や債券購入が困難なので、そのかはりせめては身體でできる御奉公をさせて貰ふとて、今も債券の包を抱へて隣の隣組まで世話してゐるのである。

千二百圓近い國債類が、それと言へば半日もかゝらずにさばけしてまふ隣組、——もとより經濟的に餘力なくしてはでき難いことであるが、それも所謂職域奉公の實踐から生れるところ、さうして何よりも先づ氣組ではないか。

これは或る筆者の友人の言であるが、毎年の所得稅や營業稅を納めるに當つて、今年はいくらくら稅金を「取られた」といふ言葉をよく耳にするし、甚しきは貯蓄組合の貯金や國債類の購入ま

で恰もただ捨てる金のごとき意識を持つたり、「貯金をさせられた」「債券を買はされた」といふやうな言ひ方をしたりする人があるのは、まことにもつて心外なことだ、といふのである。所得税や營業税を納めるのは國民の當然の責務であるのみならず、それに相當する收益があつたればこその結果であり、納税によつて國民の責務を果すことのできるのを、自ら欣快とすべきではないか。殊に世紀の大戰爭完遂態勢下にあつて、戰費の一端をも負擔し得ないでは良心の呵責に堪え得ぬ筈であり、又實際問題としてもしも納税の要もないほど收入が乏しければ決して人間並の生活はできないであらう。いはんや、貯蓄や、國債類の購入は、國家のためであると同時に自分たちのためでもある。「貯金をさせられた」「債券を買はされた」「税金を取られた」は、すべて、むしろ、「貯金をさせて貰つた」「債券を買はせて貰つた」「税金を納めさせて貰つた」でなくてはならぬ。少くとも意識の上で、貯蓄や債券購入や納税やを國民として、人間としての喜びを感じなくては嘘である。不用意な言語のはしに現はれる「税金を取られた」流の意識こそ、實に個人あつて國家なく、眼前の小事を知つて經國の大事を知らぬ恐るべき誤謬であり、かかる意識の撲滅が銃後國民の精神運動最大の急務である。——と友人某ば呼號する。まことに傾聽すべき説であらう。

個人から一家へ、一家から團體へ、團體から國家へとつながる大道——貯蓄の道はそのやうな一筋白き大道である。この大道に副つて歩む者——道を見失はぬ者は、一事が萬事、納税等においても亦模範的だ。——『納税成績良好にして滯納者なし。』と重富氏の率ゐる隣組はその點でも折紙付なのは當然である。

重富氏方の店先からは、この隣組に屬する家々の約半數が見渡せる。

筋向ひの馬具商糸永次男氏!この人が貯蓄戰有數の闘士。

夫婦に娘ばかりの子供四人、弟子が一人で計六人家内。あるじ次男氏は重富氏に劣らぬ勤勉努力主義で、早起き夜業の實踐家である。

國民貯蓄組合幹部

弓具と馬具、よい對照をなすこの二つの店は、常におそくまで夜業をやる。表を閉し、燈火を洩さぬ設備のなかで、ひたすら就業に餘念ない。

そのさき隣のミシン販賣業井上千吉氏は壯年團幹部で警防方面にも關係してゐるが、貯蓄にも勿論熱心。

その隣の兒童乘物商池田八郎氏もなかなかの貯蓄家。隣組の會計をしてゐる。

更に重富氏方の隣家で、さ

きにちよつとふれておいた帝國興信所支所長和田虎治氏は、この「明治通三丁目西隣組國民貯蓄組合」の「理事」として貯蓄報國に邁進する人である。

(六)

和田虎治氏は高知縣の產、東京京橋櫻橋南側に本所を置く株式會社帝國興信所の久留米支所長として昭和八年に赴任したのだから、すでにここに來て、恰度十年の歲月を重ねた譯である。大柄な體軀にふさはしく顏も大づくりだが、柔和の相を備へ、物腰甚だ謙虛な中年の好紳士だ。夫婦の間に男女一人づつの子を持つておるが一男の方は、支那事變で應召、中支方面に轉戰二年、凱旋するや軍屬として師團司令部に入り、現在は晴の南方建設戰士の大命を帶びてビルマ方面に在る。

「最近漸く手紙をうけとりました。元氣でやつておるらしいので安心してゐます。一人息子ですが、この時局下の個人的な都合など言つておる場合でないので、直接お國のために盡すことのできる仕事をさせて貰つて喜んでおります。」

控え目な語調のうちにも底力の籠つた、賴もしい言葉だつた。

まだ女學生らしい娘さんと、奥さんとの三人ぐらし。水入らずの食事でも、話は遠く未知の南國に在るひとの上にそそがれるであらうけれど、祖國といふ大きなものの前にぬかづく大義のころは、この親の心中深く流れつづけてゐるのにちがひない。その祖國愛と同じ精神が和田氏をして貯蓄報國の實踐に驅り立てたのである。

重富氏の打明け話によると、和田氏は以前一冊の貯金通帳も持たぬ——むしろ貯蓄といふやうなことには關心のない人物だつた由である。それが數年前から一躍貯蓄戰士として乘出してきて、今では割當豫想額の三倍も引受け、組合の集金事務を一手でやつてゐるのだ。

その話を聞いたとき、筆者の頭にはぴんと響くものがあつた。その想像を確めるために筆者は和田氏へ訊いてみた。

「貯蓄のことに努力されるやうになられた動機とでもいふやうなものはありませんでせうか?」

「一言にして言へば時局です。」

和田氏は、打てば響くやうに言下に答へた。

「飛行機や艦船はむろんのこと、一發の彈丸をでもたくさん造ることが最大問題だとすれば、安閑としてゐられません。それには、何といつても貯蓄が重大な役割を持つと思ひました。誰にでも、どんな場所ででもできる國家への御奉公は貯蓄でせう。自由主義經濟の時代ではいたづらに金を貯へることは考へ物でした。むしろ入れては出し、出しては入れ、金を固定させぬことが道義に叶つ

たことだつたでせう。しかし支那事變以來日本の事情は一變しました。政治も經濟も新しくたて直されねばならぬときが來たのです。貯蓄といふものの意味がもう個人の利慾ではなくなりました。私はさういふ風に考へますが……。」

ひそかに想像してゐた通りの和田氏の答へだつた。

論旨は或は誰にでも一應考へられることかも知れないが、永年の生活樣式を打破して、時局の要請に應ふべく身を以て實踐するといふことは、存外誰彼にできることではないであらう。重富氏のごとく、終始一貫、貯蓄の道に精勵してきたのもさることながら、和田氏の如く嘗ての自己から脫却して新しい信念に生きるのは、考へやうによつてはより一層頭の下る行爲ではないか。しかも、これは、これこそは時局が生んだ眞摯な思念の歸結としての尊い實感にほかならぬ！

立志傳中の人重富林吾氏を組合長に頂き、それを補佐する理事として愛國の一念に燃ゆる和田虎治氏を持つこの組合が表彰されずしてどこに表彰に價するそれがあらうか。

婦人會方面での世話役永島未亡人の長男と、和田氏の子息。一は陸軍中尉として戰塵に塗れ、一は軍屬として共榮圈の建設に挺身する、このことも亦筆者にとつて感銘深いことがらであつた。

和田氏は語をついで語る。

「この組合の特徵とでも言ひたいのは、組合員たちの足並がよく揃つてゐることです。むろん重富さんの不斷の努力によるのは明らかですが、全部の人が重富さんの意を體してやつてゐるのはまことに心强いと思ひます。よその組合でも、隨分多額の割當を實行してゐるところもあるやうですが、たとへば組合中に一人か二人の金持ちがあつて、それが大部分を引受けておるといふやうなこともあるらしいんです。それも結構ではありますが、みんなして心を合せていくといふのはたしかに誇つてよいことだと思ひます。」

正にその通りだと筆者も同感した。

「最近町內會の方の副會長をさせて頂くやうになりまして、大任が果せるかと心配してゐます。でもまあ、折角推薦された以上、できるだけの努力をして、銃後の努めを果したいと考へておるんですが……。」

そのことは重富氏からもすでに聞いてゐた。

この模範貯蓄組合を含む町內會は、「久留米市莊島町第二町內會」で、六つの隣組を持つてゐる。「石橋町」「忍町」「北古町」「明治通四丁目」「明治通三丁目東」及びこの「明治通三丁目西」である。

莊島町といふ所は久留米市內でも最も廣範圍に亘る地帶で、以上の外にも、「東竪町」「西竪町」「白鳥町」「靑蓮町」「弓町」「中竪町」其他多數の町名があるが、「莊島何々町」と稱ばれるそれ

らのうち、「明治通」だけは「莊島」を冠せずして稱ばれる。「明治通」といふのは、本文冒頭に書いた舊筑後軌道線、現在バスの運轉されてゐるアスファルトの大通りに對して數年前命名された稱呼である。「莊島」はその大通りをはさんで兩方に擴がつてゐるので、なかでその大通りに面したところだけ「明治通」を以て稱ばれてゐる譯だ。「莊島」はいはゆる「目貫き」或は「盛り場」ではないが、それらをすぐ近くに持ち、住宅街を主として寺院や商店をも含む大地域なのである。

「莊島町第二町內會」の町內會長は、眼科醫江口一郎氏、重富氏や和田氏の家の向ひ側に居住してゐるが、隣組は違ふ。

本年の町內會・隣組の役員改選で、莊島町全體の大部分は新任者の登場となつたが、「第二町內會」は江口氏の再選となり、副會長として和田氏が新に就任したのである。隣組長も多數更迭したなかで、重富氏は十數年前の「町總代」から引つづき依然隣組長に重任した。

「あの町內會はいつたいに何事にも優秀です。表彰された貯蓄組合以外の隣組の組合もなかなか成績がいゝ。」

久留米市の振興課長石橋氏は筆者にさう言つたが、思ふにそのやうに優良な實績によつて江口氏の信望が氏の辭任を許さぬほどに備はつてゐるのであらう。重富氏が「名隣組長」として重任の止むなきにいたつたと同樣に、江口氏も亦「名町內會長」に相違ない。

新に推された副會長和田氏が、その人格識見よく衆望を擔つての登場たることも疑ひないところである。

和田氏邸を辭した筆者は、その足で江口眼科院の門をくぐつたが、折あしく院長は不在で、殘念ながら町內會長の聲咳に接するの機を逸した。

(七)

昭和二年から昭和十三年までの十一年間、筆者は久留米市に生活した。今回の模範貯蓄組合に關する出版企劃に當り、菲才よくその任に堪へ得るや否やを懸念しながらも、敢てお引受けしたのは、久留米市の、土地と住民とについていささか知るところある故であつた。

產を失つて鄕里小倉を捨てた筆者は、知己のすすめで久留米に住むやうになつたが、當初志してゐた商業への計劃を放棄し、別の方法によつて生計の資を得ることに轉向した。

それにはもとより理由があつた。由來、久留米は久留米絣等の特產物を持ち、大阪あたりの商人も九州へ入れば必ず足を向ける一種の商工業の都市ではあるが、ろくに資本も持たぬ他鄕人が、利子のつく金などによつて漫然、店舖を構へたりするのは無謀のわざにちがひないと感じたからである。

久留米の商取引には、手工業時代から連綿たる昔ながらのおもかげが壊されてゐない。北九州の五市や福岡などは異つたものが底深く流れてゐる。消費生活中心の所謂近代都市的雰圍氣の浸潤が殆んど見えず、醇朴にして古風だ。商人は手堅くて、この市では「やまし」は通らない。ない金をあると見せての芝居を打つやうな商人は却つて落伍し、ある金もないかのごとくつつましく經營していく商人が勝利を占める。利は薄くとも確實を旨とし、必ずしも多く賣ることをも爭はない。堅實第一である。華美を避けて實を養ひ、地味で忍耐強く、底力に富むのが、この市の性格なのだ。

人或は、久留米花柳界ひところの殷振ぶりを指摘して異を樹てるかも知れないが、それは皮相の見にすぎない。筆者の觀察によれば、その現象も亦この土地の手固さを證明する事實である。久留米の花柳界は他の都市に比して頗る安直だ。他愛ない大盡遊びに現を抜かすやうな手合は普からなかつたのであらう。それゆゑ、一度ここに遊んだ旅人は、再遊の機を策する。久留米花柳界を賑はすのは大半他所の土地から來る客であり、そこに落ちる貨幣は主に他鄉の金である。土着の遊蕩兒など滅多にゐはしないのだ。

重富林氏の性格はそのまま久留米の性格でもあることを筆者は痛感した。重富氏は既述のごとく久留米に生れた人ではない。しかしながら氏の出身地たる、浮羽郡千年村といふ所も亦久留米的性格の顯著な土地柄なのである。

千年村は吉井町に隣接し、地方色を同じうする村で、そこで數十年村長の職にあつた佐藤準藏氏を筆者は知つてゐる。粗衣粗食、質實剛健をもつて鳴つた硬骨の士であつたが數年前物故した。

久留米在住當時筆者は吉井町にしばしば出張し、この町もなじみ深いのであるが、町の風貌に關しては、曾て「神童傳」といふ小說の冒頭に描寫した拙文があるからそれを引用しやう。

——『明治二十九年、生葉、竹野の兩郡合併して現在の浮羽郡を形成したが（中略）吉井は當時から「町」であつた。天正年間星野高實の築いた福丸城が廢城となつた後城下町を移した所が今の吉井町で、清酒は最も優れた產物、明治二十年代の年產額は六千七百餘石、大正に入つて酒造業者の數も殖え、二萬石內外の數字を示すやうになつた。しかし町全體としては、古くから展けてゐる割に現在なほ格別の目覺しい進展は遂げてゐない。他町村に田畑を持つ所謂「不在地主」が多く、昔造りの豪家が甍を並べ、會社といへば殆んど他を相手の金融會社で、つまりさういふ特殊な町情が、却つて近代都市としての發展を阻止してゐるのであらう。（後略）』

これは若干の資料と筆者自身の觀察とによつて三年ほど前に書いた文章だが、最近所用あつて吉井へ出向いてみて、其後もこの町にはさしたる變貌もないやうに見受けられた。上揭文章にも指摘したごとく、いはば活氣に乏しい町ではあるが、一面近代化を赦さぬ根深い傳統が籠つてゐて、どことなくどつしりとした重量感がある。

千年村はこの吉井町につづく地帶で、吉井の持つ地味な底力の上に、村落特有の勤勞精神を加味した色合を持つてゐるのである。

久留米市となると、昔的氣質に、更に幾分の都會的積極精神を加へ、尙武の氣風をも併有する。かくてこれらの地方を貫く最大の特徴は、「粘り强さ」であることは疑ひを容れ得ないであらう。

千年村に生れ、久留米に根を据えた重富林吾氏の「粘り强さ」は、そのままこの地方の地方性とも言へるし、そのやうな「地方性」の代表的人物の一人が重富氏だとも言へやう。

曾て、他地方の商人たちによつて、「久留米の商人は取引がしにくい」と言はれ、甚しきは、「久留米の商人はケチで我利我利だ」と言ふ者すらないではなかつた。しかしながら、これは多分に言ふ側の得手勝手であつたにちがひない。「取引がしにくい」といふことは即ち、「おだてに乘らぬ」「甘い汁を吸はせてくれぬ」といふことであり、「ケチで我利我利だ」と言ふのは即ち、「無用の浪費をせぬ」「地味で堅實」なのを意味するのだ。」筆者の見るところでは、久留米人は「堅實」ではあるが決して「惡辣」ではない。世辭や追從も言はぬかはり法外の利も貪らぬ。さういふ特質は、ある一時的において、むしろ「時代おくれ」などとも解されないではなかつた。花火線香のやうな自由主義經濟から見れば「立ちおくれ」の感もあつただらう。昔ながらの地方的傳統性は派生的な風波に押流されず、連々として本來の面目を失はなかつたのである。さうして今やその傳統・その地方性は頓に光芒を放ち始めた。

見よ！　榮光輝く表彰を受けたのは「明治通三丁目西隣組貯蓄組合」のみではない。大臣賞ではないが、やはり何かの機關によつて表彰された貯蓄組合が市内にもう一つあり、更に、「模範町内會」として縣下を通じてただ一つの榮冠を獲得した「櫛原町」の町内會があるとのことである。

「ここの市内の町内會、隣組、貯蓄組合などは、概ねみな優良なんです。表彰に價するものは實はもつとあるやうです。」

石橋振興課長はさうも言つた。

「粘り强さ」が物を言ひ出したのだ。「堅忍持久」といふ言葉があるが、これはそのままこの地方の人々にふさはしい言葉である。「苦難に耐へる心」物事を「やり拔く心」、現下において最も必要とされるそれらの「心」が、この地方の人々には傳統となつて血脈を流れてゐるのだ。

「近代都市としての發展を阻止してゐる」と筆者が書いた吉井町の町情は、ある意味では久留米市の「市情」にもあてはまる。吉井にはカフェらしいものがない。美容院も殆んど發展しない。久留米ともなれば、さすがにそれほどではないにしろ、曾て「立ちおくれ」と批評されたやうに、所謂「近代文明」の滔々たる潮を鵜呑みにはできなかつたのだ。そもそも「近代」とは何か？——最近文壇でも「近代の超克」といふやうな命題が論議されてゐるが、「近代」といふ語の定義如何も輕々

に論斷すべきでほないにしても、大正年末から昭和初年にかけての日本都市における近代風景に、幾多寒心に價するものが含まれてゐたことは、今や識者の否定し得ぬところであらう。支那事變を契機とする一大變鐘のとどろき渡るまでの或一時期、かたちの上でも精神の上でも、恐るべき敵性文明の影響がなかつたとは言へない。さういふ意味での「近代」に骨髄まで蝕まれることなく、よく傳統の上に生きて來た久留米地方の地方性は、今こそ新に認識されてよいのだ。軍都として、或は工業都市としての地方色に關しては、ここには敢て觸れないが、それらをもひつくるめての「この市の性格」が高度國防國家建設の精神に適合する特徴を備へてゐることは、異論ない筈である。

短い冬日の、すでに暮れきつた街路を歩きながら筆者は、さきほど聞いた重富氏の言葉をあれやこれやと思ひ浮べた。最も心に殘る言葉は何ぞ圖らん最も平凡な言葉であつた。それを讀者にももう一度聞いていただいてこの稿の終りたい。

——貯蓄の秘訣に珍らしい話はない。勤勞と節約だけである。さうして問題はなだその實行如何である！

（終）

貯金の神様

第一話

八幡市波多野鐵工所國民貯蓄組合

山の頂には、雪がまばらに積つて居た。

寒い日である。

冷めたい風が吹くと、雞は胸毛をふくらませて、小屋の隅にうづくまり、ククと何か訴へてゐるやうである。

タキは大根の葉を細かくきざんで、イリコの出しがらを粉にしたのと、配給のおからをまぜ合はせたものを、かげた井に入れて、小屋の中に入れてやつた。

「おばちやん」

近所の女の兒が、垣根の外から聲を掛けたので、タキは蹲んだまゝ見上げた。

「雞、卵うまないの」

「あゝ、まあだ生まんよ」

「いつになつたら生むの」

「サアネ、うちのむすこが歸へつて來る頃ぢやろかなあ」

「おばちやんとこの兄ちやん、いつ歸へるの」

「もつと先のことぢやろう、休暇で歸つて來るちゆうことぢやが……」

タキは、たつた一人のむすこが入隊して、今は、遠い○○に居るけれど、休暇で歸へれるかもしれないといふ手紙を、二十日ばかり前受取つたのであつた。

はつきりとは判らないが、二三ケ月も先のことだらう。と書いてあるのを讀んだ時、むすこが生きて居るうちに、もう一度顏を見ることが出來ると思ふと、たとへやうのない、飛び立つ程の嬉しさが、ひしひしと胸を打つて、有難さに、こみ上げて來さうであつた。

入隊した日から、むすこは國に捧げたもの、自分の子供ではない。と堅く心にきめて居たので、遠くへ發つて征く日に、○○迄見送りに行つたのが、此世で親子が逢ふ最後であると覺悟をきめて居た。

生きて再び逢へないもの、ときめて居たのに、休暇で歸へるといふ知らせは、何か夢のやうな氣がするのであつた。

親一人、子一人の貧しい暮しではあつたが、孝行なむすこが、波多野鐵工所で旋盤工として働き、タキも女工員として勤めて居たので、生計は樂な方で、時たまの休日に、むすこが母親をつれて、映畫を見に行く睦まじい姿を見ると、近所でも羨ましがられたものである。

「タキさんも仕合せですね」とか

「タキさんとこは樂でいゝですね、殘りませうね」とか

一緒に工場で働いて居る誰彼から言はれたこともあるし、

「早くお嫁さんを貰つて上げなさい、さうすればあんたも樂隱居ですよ」

とも言はれた。そんな時タキは、まつたく幸福感にひたるのであつた。

工場の組合貯金も、むすこの分も自分の分も、一月一月增へるばかりだし、隣組の貯金もして居るし、「つもり貯金」も毎月缺さなかつた。

一生にたつた一度のことだから、むすこに嫁を貰ふ時は、立派に出來ない迄も、分相應にしてやらねばと思つて、少しづつ貯金をして居るのもある。

國債も債券も、一度に澤山は買へないが、五圓とか十圓とかの券を、工場からも、隣組からも一枚づつ買つたのが、二十五六枚もある。

タキの其頃の生活には、何一つの不足といつてなかつたし、惱といつてなかつたが、たつた一つだけ、決斷しかねる問題があつた。

それは、むすこが入隊する前に嫁を貰つたがいゝものであらうか、それとも、兵隊から歸へつてから貰つたものであらうか、といふ問題であつた。

兵隊に行く前に嫁を貰つて貰つて、出來れば孫の顏も見たいのが、親心の勝手のやうな氣もしないではなかつた、といふのは、戰時のことだから、兵隊に行けば、生きて歸へらぬものと思はねばならない。吾子であつて吾子でなくなる。さうすると嫁が可愛想だ。むすこにしても、嫁や子供に未練が起つて、立派な御奉公が出來ないやうなことにでもなつては、それこそ大變、取りかへしがつかない。といふ氣持にもなるのであつた。

戰場に行つたむすこが、生きて戻るといふ考へを持つては、國に殘つたものの御奉公に缺げるところが出來る。それかといつて、血筋も絶やしたくない氣もする。

これぱつかりは、タキにとつて一番大きな難問題であつた。どちらにも、心を決しかねて居るうちに、むすこは入營したのである。

それならそれで、さつぱりとして心殘りはない。斯うなつた上の、たつた一つの希ひは、どうぞむすこが立派な手柄を立てて呉れるやうに、國の柱ぢや礎ぢやと言はれるやうな、日本人らしい死に方をして貰ひたい、といふことであつた。

毎朝のお宮參りにも、むすこの武運長久、立派な手柄を立てますやうに、と祈りはしても、どうぞ生きて歸へりますやうに、と祈つたことはたゞの一度もない。

それ程しつかりした覺悟の出來たタキではあつたが、國に捧げたむすこが、休暇で戻つて來るといふ知らせは、思ひも掛けぬことであり、タキの心を轉動させる程に、喜ばせたことは否めない。

むすこが戻つたら、何もない時だから、せめて雞でも食べさせやう。ねぎも、猫の額程のところに、自分で作つたのがあるし、砂糖も殆んど使はないから澤山殘つて居る。出來れば、おはぎかだんごでも作つてやりたいものと考へて小豆のない折だから、あんをどうしたものかと、人知れず工夫をして居た。

むすこが歸つて來た時のことを、いろいろ想像して居ると、いつ時間が經つとも判らない間に、たつた一人食べる夕飯のチャブ臺の前に坐つたきり、時を過ごしてしまふことが多かつた。

「おばちやん、明日からお砂糖の配給がありますつて」

「へエ、おおきに」

近所の女の兒は、そのまゝ隣の家に、配給のしらせに行つてしまつた。

今でこそ、むすこも近所のほめられものになつて居るし、工場でも、何かの話が出ると、勞務の石橋さんは

「高田を見習へ、高田のやうにならなきやいかん」

といつて、むすこの高田の勤勉な話をして工員を勵ますのであつた。そのむすこは、もともとそんな模範工員ではなかつたのである。

それが、どうして、そんなにも變つたかといふに、高田がたしか十九、二十の頃であつたらうか、或日の晝休みの時間に、勞務の石橋を訪ねて、もじもじしながら、工場の組合貯金を出させて呉れ、といふのであつた。

「さうか、たつて必要といふなら貸してもいゝし、或は又、工場の互助會のお金を貸してあげてもいゝんだが、一體何に使ふつもりだね」

高田はちよつとたぢろいたが、默つて居る譯にもいかなかつた。

「その……是非いるんです」

「是非いるは判つた。しかしだね、わしとしては、使ひ途がはつきりして居ないと困るんだ。たとへ是非いる金でも、組合貯金には、君達も知つてる通りの規約があつて、その規約に定められた場合以外は出せないんだから、場合によつては、互助會の方から融通してあげてもいゝといつてるんだ。使ひ途を言つて見給へ」

高田は、使ひ途については言へなかつた。口でこそ、是非いる、とは言つたものの、人に話して、それはやむを得ない。と言つて呉れる筋合のものでなかつたからである。

高田は、そのまゝ默つてしまつた。

友達が背廣の洋服を作つて、縞のハンチングを少し斜めに被り、氣取つた格恰で映畫を見に行つたり、休日に、仲町や中央區をぶらついて喫茶店には入つたりするのを見て、たゞ何となく、自分もまねて見たくなつたのである。

背廣を一着こしらへたい。その氣持が矢も楯もたまらなくなつてしまつた。

そんなまとまつた金は、彼は持合はせて居なかつた。あれこれと考へて居るうちにふと、思ひついたのは、工場の組合貯金である。あれがもう、百五十圓も超して居る筈だ。さう大して立派な服でなくても、三十五圓か四十圓くらひで、氣に入りさうなのがいくらもショーウインドにある。どんな格恰のがいゝかな、とも想像して見たし、どんな縞柄にするかな、とも考へて見ながら石橋氏を訪ねた譯だが、使ひ途を問ひ詰められて見ると、洋服をこしらへますから、とも言ひにくくなつてしまつた。

「君はね、工場の組合貯金を、自分の金だから何に使つてもいゝと思つてるかも知れないが、そんなものではないよ。成程、金は君のものに違ひない。しかし、組合貯金の目的が、君一人のために滅茶々々に踏みにじられてはならないんだよ。組合貯金の目的の中に、君達工員の福祉のためとい

ふこともあるが、それよりもつと大きなものがあることを、忘れちやいけない。今日本は、支那事變といふ大きな國の目的を完遂するために戰つて居ることは、君だつて知つて居るだらう。この大きな國の目的を達成するためには、國の力といふものが、充分に育つて行かなければならない。國の力になるものは何かといふと、貯金だよ。國民が貯金をすると、その金は大砲を作つたり、戰車をこしらへたり、飛行機や彈丸を作る資金になる。斯ういふと君達は、それでは自分の貯金が大砲になり、戰車になり、飛行機や彈丸になつてしまうのではないか、と考へるかも知れないが、それは間違だ。決して貯金はなくならない。君達のものとして、あく迄殘る。いつでも引出さうと思へば引出せる。だが、引出してはならないんだ。次から次に、貯金を益々增やして、兵隊に行かないものは、せめて貯金で奉公する。といふことを忘れてはならないんだ。今も言つたやうに、貯金が兵器彈藥を造る資金になるからだ。政府は直接の資金としては、國債、債券を發行して、これで戰費を賄ふのだが、貯金は、その國債、債券を買ふ金になるんだよ。だから、直接國債や債券を買ふことも、貯金と同樣の御奉公になるんだ。だから君達にあげる賞與の中に、國債や債券を、何割か入れたりもする。君達の貯金が君達にかわつて、國のためになつて居る。おまけに、貯金は自分の財產として殘り、君達の將來の幸福の源泉になる。國に奉公しながら、自分の得になる。こんないゝことはないではないか。わしだつて、君にこんなことを言つてはゐるものの、君くらひの年頃には、やはり、君のやうな考へを起したこともある。金があればあるだけ使つてしまつたものだが、そんなことではいけない。人間は、他人の經驗を自分のものにして、生かして行くことが大切だ。ことに、今の時代に生きる青年は、わしの若かつた頃の青年の心構へと一緒であつてはならないんだ。ことに、君なぞ、もう一二年もすれば、兵隊に行かねばならない、大事な體ではないか。聞けば、親一人子一人といふことだが、あとに殘して行く母親のためにも、今から心掛けて、少しでもよけいに金を置いていつて、國のために盡すのに、心殘りのないやうにするのが、日本軍人の途であり、尊さではないか。どう思ふ高田ー」

「へイ」

高田は、頭をたれたまゝ、眼をうるませて居た。

石橋氏は、高田が自分の言つたことを、よく了解してくれたことを直覺したそれでわざと

「よしよし、判ればそれでいゝ。それぢや君の組合貯金を出すことを承認するから、通帳を出して上げやう。一寸待てつ居給へ」

といつて椅子から立ち上ると、高田は、あはてゝ押しとめた。

「いえ、貯金は出しません。私の考へが間違つて居ました。これから、もつと氣をつけます」

「ほんたうに判つてくれたか」

石橋氏の逞ましい掌が、高田の肩を慈愛に滿ちた溫かさで、輕く叩いて居た。高田の心は、何かしら、强くひきしまつて、心の底から、俺は生れかわるぞ、と叫びあがるものがあつた。

それからの高田の日常生活は、まるで見違へたやうであつた。どんな仕事でも、與へられた仕事を、たゞやればいゝ、といふだけであつたのが、製品を見事に仕上げるといふことに熱中しだした。そして、その次には、何かむつかしい仕事を與へて呉れ、と要求するやうになつた。リミツトの非常に少い、精密な旋盤仕事を與へると、それを四つになつて取組むといふ風であつた。彼は自分の仕事に魂を打込むことよつて、一つの面白さを感ずるやうになつた。

彼は、俺は責任の重い體だ、心を磨くとともに、腕も磨かなければならない、と自覺したのである。

「高田は變つた」

といつて驚きの眼を見張つたのは、一人石橋氏だけではなかつた。波多野社長の眼にも、はつきりとそれが判つた。

それから夢のやうな一二年が過ぎると、高田はいよいよ入營することになつた。

石橋氏が見送りに行くと、高田は元氣に溢れる顏を輝かせて、

「私のやうなものは、兵隊になつても、人並に御奉公が出來るかどうか判りませんから、その足りないところを、兵隊に行つても貯金をして補ひたいと思ひます」

と言つた。

石橋氏は、今もその時の感激を忘れることが出來ない。支那事變が、大東亞戰爭に飛躍して、益々貯蓄奉公の切實さを感ずる度ごとに、高田を見習へ、高田を見習へ、といつて若い工員達を勵ました。

タキは、むすこが休暇で戻つたら、着せてやらうと思つて、絣の袷と羽織を洗ひ張りして、この前の休みの日迄に、毎日、夜遲くまでかゝつて、縫ひ上げてしまつた。

たまつて居た洗濯物もかたづけて、タキにとつて、今日の休日は、めづらしく、のんびりとした一日であつた。

第二話

「オイ、湯が沸いてるか」

いつも、歸へつたよ、と聲を掛ける仰木友男が、今夜は例になく、大聲でさう呼びながら、自轉車を押して、戸口を開けた。

「まあ、どうしなさつたな」

臺所から飛んで出た女房は、驚いた眼を、友男の足の先から頭の上まで、見上げ見下して言つた。

「早う雜巾バケツに湯を入れて來て呉れ、溝の中に落ちて、ざまあない」

女房がアタフタと臺所へ降りて行くと、友男は泥まみれになつた、ズックの紐を汚なさうにつまんで、解きはじめた。

藥罐の湯をうつして、水をうめ、少し熱めにした、湯氣の立つバケツを重さうに下げて來た女房は

「どうかまあ、泥まみれぢやないな」

手早く靴下をぬがせ、足をバケツの中に入れさせて洗ひはじめた。友男は洗つて貰ひながら、手首の擦り傷を、左手でじつと押さへて居たが、唾きをつけて、掌でパチパチと輕く叩いた。

「なんぼ日が暮れて暗いちうても、通りなれた道ぢやろに、どうしてまた溝に落ちなさつたな」

「それがさ、一寸考へごとをしとつたもんだから、ひよつと前から人が來るのに氣がついて、ハンドルを斯うとると、向ふも斯う來る、こつちにやると、又、斯ふ來る、エ、糞つと思つて、グツとハンドルを左に切つたらドタンと轉んで、自轉車は田の中に飛び込みやがるし、俺は片足、溝の中に、ヂヤブンと突込んでしもうた」

「危いなあ、あんたは。あはてもんのごとあつて、何處かぼんやりしとんなさるけ……」

「このくらいで濟んでよかつた。相手に怪我どもさして見い、大けな大事ぢやつた」

それぢやけ、あたしや自轉車を、ほん好かん。電車にしなさりやいゝとに、どうしても自轉車で工場通ひをしなさる」

「馬鹿なこと言ふな。中間から黒崎迄ぢやけ、汽車に乘つてまた電車に乘らにやなるまいが。その金でも、積り積つて見い、大きなもんぢや。それぢやけ、自轉車を買うて少しでも貯金を仕樣と思ひ立つたんやないか。今更、自轉車がやめられるもんか」

「そりやまあ、さうやけんどなあ。溝に落ちるのも、足からでよかつたけんど、頭からでも這入つて見なさい、くろんぼのお化のごとなりますばい、あたしや好かん」

「ハヽヽヽ、この年になつて好くも好かんもないが、頭からぢや俺も厭ぢやのう。それにしても、斯んなことが、さう度び度びあつちやどもならん。今日は貯金のことを考へとつたから、前から人が來るのを、うつかりしとつたんぢや」

「ヘェー」

女房は、薄暗い電燈の光りに、顔の半面を輝らされて、近頃めつきり老けて來た友男を見上げた。

「人のする通りにしたら、仕たいことをしとつたら、金は一錢も殘りやせん。うまいものも食ひ、着たいものも着るぢや、給料は何ぼ貰ふても足りやせん。人が電車に乘るところを自轉車に乘り、靴をはくところを下駄をはいて節約せにやつまらん。俺は實際さうしとるが、それでもまだ、うまくいつとらん。それで考へよつたんぢやが、これはどつかに、まだやり方の悪いところがあるんぢやないかと。いろいろ考へよつたら、やつぱり悪いところがあつた」

「へエー、どんなところですな」

流石に女房は、家庭生活の中心になつて居るだけに、悪いところがあると言はれると、自分の責任のやうな氣がして、熱心に耳を傾けた。

「この大發見で、わしが自轉車を人にぶつつけやうとしたり、溝の中に落ちたりしたんぢやから、大した發見ぢやぞ」

女房は思はず、クスツとふき出した。

「つまり何やな、金の使ひ方は誰でも、其時其時、多少工夫して使ふ。けんど、さうして殘した金の始末が出けとらん。おろそかにする。折角苦心して殘した金が溜らん。殘したら溜めるといふことが大切なんぢや。それが、何か彼か、殘した金が目に立たんやうに出ていつてしまう。そこぢやて、わしが考へたのは。一ヶ月どれだけ節約したといふことが第一はつきりせにやいかん。その次は、殘したぶけを直ぐ貯金する。明日郵便局に行かう。あさつてにしやうと思ひながら、のびのびに持つとると、何か彼か、出て行くことが起つて來る。まあたとへ話しがぢや、俺が殘業の二三日もつぶけると、さぞきつからう、今日は鰯にしやうと思ふたが、殘つた金もあるし、鯖をふんばつして、一遍ぐらひ喜ばせてやらう、といふ氣になる。無論、俺も悪い氣持はせん。嬉しい。嬉しいには違ひないが、殘した金が知らん間に逃出すといふのが其處にあるんぢや。酒にしてもさうぢや。配給酒を買ふ時は、八合は八合に違ひないが、毎日一合づつ飲むのを、今日は寒むかつたやろう、今日はきつかつたやろうで、一合を二合にすると、八日もつものが七日になり六日になる。六日ぢやろが七日ぢやろが、一月八合に變りはないぢやないかといふ考へ方がいかんのぢや。何に限らず、出來るだけ長持をさせるといふのが、節約のコツぢや。節約と貯金は夫婦のやうなもんぢやから、どつちが缺けても家庭は出けん、どつちが缺けても金は溜らん、そこでわしが考へた」

女房は微笑して次の話をまつた。

「いや、新規にまた考へたんぢやない、さいぜん言ふた考へぢや。なんぼ俺かて、さう何遍も考へるもんか、まだ初めに言ふた考へといふのを話しちや居らん、藝題はこれからぢやが」

「前置の長いこと。まあ兎に角上つてつかあさい。いつ迄もこんなところに坐り込んで」

女房に洗つて貰つた足から、湯氣がほのぼのと立ちのぼつて居た。

友男は茶の間には入つて、着物を着ると、帯を結びながらチヤブ臺の前に坐つた。六疊程の、茶の間であり、居間であり、時には客間にもなる。

女房は御飯の給仕をしながら、友男の話の續きを待つた。

「アツ、さうさう、給料袋が、上着の內ポケツトに這入つとるから出してくれ」

さう言はれて女房は、今しがた、汚れたズボンと一緒に、板の間に置いた上着を取りに行つた。薄暗がりの中で、ゴソゴソ探して居たがやがて、茶色の袋を持つて戻り、友男に渡した。友男は袋を受取ると、つつましく押し頂いてから、女房の前に袋を差し出した。

「給料だ」

「有難う御座いました」

女房もまた、丁寧に袋を頂いた。

「工場の組合貯金が、月々殘つて行くものの、隣組の貯金と、時々買ふ公債くらゐぢやたいしたことないなあ」

「內でも、少しづつしとるけれど、もうこの上貯金もでけんなあ」

「でけんことはない。何でも、すりやあ出ける。それで、わしがさいぜん言ふた考へぢやが、名案ぢやけのう。いゝか、斯うするんぢや。つまり、給料を貰ふて來たら、さしあたり、要るだけの金をのけて、あとは皆な郵便局に貯金するんぢや。それから、要るだけづつ引出して使ふ。さうすると、月末になつて節約しただけのものが、たとへ一圓でも二圓でも、貯金の通帳に殘る。月末に一圓殘つたからといふて、すぐに郵便局に飛んで行く人は少いが、斯うして置けば、いやでも應でも殘りは貯金になる。どうぢや、たいした名案ぢやらう」

女房は失望したやうに、ぼんやり、友男の顏を見つめて居た。

「どうか、よからうが」

「ちもとも、ようはない」

「どうして」

友男のあきれたやうな顏が、女房を見つめる。

「そげなことすりや、郵便局の人に顏見られて恥かしいがな」

「馬鹿な、何が恥かしいことあるもんか」

友男は、ふくれつ面をして言つたが、實は、彼もこの考へが浮かんだ時、名案には違ひないが、一寸郵便局の人に恥かしいなあ、とやはり思つた。

誰でもが、さうするやうになれば、恥かしい譯はないが、八十圓入れて七十八圓迄出すとか、五十圓入れて、四十九圓迄出す、といふのが、いかにも恥かしい氣がするのである。預けたまゝ出さ

ないといふのなら、五十錢を預けに行くのも、きまり悪くはないが、彼等は、貯金を出す、といふことに甚だしい羞恥を感じた。

そこで、それにかはるよき、何かいゝ方法はないかと、一心に考へて居るうちに、溝に落つこちるやうなことに、なつたのである。

フウフウいひながら、友男が溝から這ひ上つて、田の中から自轉車をかつぎ上げて、さうだ、給料袋はあるかな、と內ポケツトに手を差し入れて、なくなつて居なかつたのをたしかめたとたん、實に、そのトタン、彼の頭の中に、稻妻のやうに、いゝ考へが浮かんだのである。

そこでまづ、女房が何といふか、初めに自分が考へついた、給料をそつくり預ける案を話して見たのだが、世の中に似た者夫婦といふが、自分と同樣に、きまりが悪いの、恥かしいのといふので、內心、案の條だ、わざと、ふくれつ面をして見せたのだつた。

「仕方のない奴ぢやのう。そんなら斯うするか。狀袋の古いのを十枚ばかり持つて來て、米代十五圓なら十五圓、一つの狀袋に入れ、表に米代十五圓と書いて置く。おかず代二十圓なら二十圓とまた別の袋の表に書いて入れて置く。何だ彼だと十枚もあればよからう、それから別に一枚、節約袋といふのをこしらへて置く。この袋は例へばお前が畑で作つた菜ツ葉を煮ておかずにした時は、おかず代の袋の中から、菜つ葉代として、十錢でも十五錢でも出して節約袋に入れる。だから俺が用事で折尾まで行くのを、自轉車で行つたら、交通費の袋の中から、折尾迄往復十錢の汽車賃を使ふたつもりで、節約袋に入れる。こんなふうにして節約袋に入れた金は、使うてしまふたと同じ金だから、手がつけられない。どんなことがあつても、あの金を、と使う方で節約袋を思ひ出しちやいかん。そして、月末になつたら、五十錢ぢやろが一圓ぢやろが、必ず郵便局に持つて行つて預ける。斯うすりや、給料をそのまゝ郵便局に預けて、入るだけ引出してくるのと、だいたい同じ効果が得らるると思ふとる。出來るか」

「それなら出けまつしよう」

「でけんごとありや、給料を厭でも郵便局に預けるごとするぞ」

「やります、やつて見まつしよう」

「ヨシ、そんなら、今月からやつて見い」

「ハイ」

女房は答へると立ち上つてて狀差から、古い狀袋を十枚ばかり抜いて來て、裏側に、米代、おかず代と、いちいち叮寧に書き入れはじめた。

時計が午後七時を示して居た。いつも遲い晩めしを、女房は今夜もまたおくれて食べることになつた。然し樂しい氣がした。

第三話

晝休みの時間には、工場の中の空地でキャッチボールをする若い工員もあれば、廣場に集つて相撲をとる連中もあつて、漲ぎる元氣が、若者達の身内から、ほとばしるかのやうであつた。

潮くさい風が、海から吹き上げて、妙見山に突きあたると、そのまゝ、波多野鐵工場の中に辷り落ちて來るやうであつた。

早い雲足の間から、大陽が出ては隱れまどろむ光りが、まるで北國のやうに、薄つすらして居る。それでも、陽が照つて居ると、日向ぼつこの背中は、心よい溫かさになる。

平田辰丸と高場治夫は、積み重ねてある材料の端に腰を下して話して居た。

「すごかつたね」

「ウム、すばらしかつた」

「何だか、僕自身が飛行機に乘つて爆撃に向つて居るやうな氣がした」

「僕だつて、そんな氣がしたよ」

「密雲の中を飛んで居る時は、映畵ぢやないか、と思ひながらも不安だつた」

「神の助けといふんだね。あれが、ぽつかりと雲の切れ目から眞珠灣が見えた瞬間、思はず歡聲が揚て、胸がわくわくした」

「僕はもう、まつたく夢中だつた。あすこだ、やるぞつ、やるぞつと拳を握りしめて、椅子の上で體を浮かしたり、動搖させたり、何か斯う、じつとして居らなかつた」

「眞下に、敵の軍艦の列が見えた時、ヨウシあいつだ、と思はず僕は口走つた」

「僕もだよ」

「ドガンと最初の魚雷が命中すると、火柱と水煙りが卷き上つて、見る見る敵艦が傾いて行く。萬歲…萬歲!!と言つたのは僕ばかりぢやなかつた」

「あすこんとこは、もう映畵といふ感じを全然忘れてしまふね。誰れも彼れも、戰爭に直接參加して、敵を爆撃してるやうな氣になる」

「次ぎ次ぎに爆撃して行く、海の荒鷲のすごさつてなかつたねえ」

辰丸も治夫も、話しながら、ハワイ、マレー沖海戰の映畵を、もう一度幻想しながら、勝利の興奮を新にして居た。

いつの間にやつて來たのか、彼らの後に勞務の石橋氏が立つて居た。さつきから、二人の話を、微笑みながら聞いて居たのである。

「君達」

二人は驚いてふりかへつた。

「ハワイ、マレー沖海戰の映畫を見たのか」

「ハア」

二人は頭をピヨコンと下げて、おじぎをしながら、きまり悪るさうにした。

「あんな映畫は、國民として是非見とかにやいかん。まつたく、いゝ映畫だつたね」

「ハア」

「君達は今、あの映畫の、國民的興奮の場面を感心して話して居たね」

「ハア」

「勿論、あすこが、眞珠灣攻撃のあの場面が、あの海鷲の勇敢なそして壯烈な活躍振りや、輝やかしい、あの大戰果にのみ、夢中になつてはいけない。わしは映畫のことは素人でよく判らんが、あの映畫のもつ使命くらいは、くみとることが出來ると思ふんだ。あの戰果の中には、も一つ大切なものが織込まれて居る。それは何かといふと、あのやうな偉大な戰果を擧げる迄の海鷲が育つて行く、あの不屈の精神力の育成、あれが大切なことぢやないかと思ふ。君達のやうな若い者は、何れ兵隊に行かねばならないし、よしんば、國内で産業戰士として働いて居るあいだでも、あの前半の不屈の精神力の育成を、戰果を通じて、自分自身が育成されて居るつもりで、身につけることが必要なんだ」

「ハア」

二人は成程、と思ひながら、ボートレースに負けた生徒達が、一生懸命、汗みづくになつて駈足して居る場面や、負けのき相撲でなく、勝のき相撲の場面を、心の中に思ひ出して居た。

それから、教官の切々身に泌みるやうな訓示の言葉を、頭の中に再現させた。

「君達が、たゞ興奮だけであの戰果を見たのだつたら、も一度見直して身につける方がいゝねえ」

「ハア」

「君達も國内に居て、あゝいふ輝やかしい、偉大な戰果を擧げるための蔭の一役をつとめて、軍需のとどこほりない補給を、といふ大切な役目を引受けて居るのだが、その上、更にあの大戰果に、國民として應へねばならないものがあるが、何か判るか」

「判ります」

「平田、君言つて見い」

「前線の勇士に恥かしくない生活をすることです」

「一言に言へばさうだが、具體的にはどんなことだ。高場、言へるか」

「言へます。自分の職場に一生懸命精を出すことです」

「ウム、平田、君は」

「闇をしないことです」

「ウム、勿論、さういふこともだが、まだ外にある筈だ」

平田も高場も、一寸の間考へて居たが、平田が顔を上げて言つた。

「立派なからだをつくつて、いつお召しにあづかつてもいゝやうに、して置くことです」

「それから」

「不平や不満を言はないことです」

高場が言つた。石橋氏は肯いたが、まだ満足な答へに接しないので、これは、自分の問ひ方が悪かつたのかな、と思つた。

「君達が今言つたことは、この戰時下の國民の心構へとして、どれも皆な大切なことだ。どれが一番大切で、どれが二番目に大切だ、といふやうな區別は出來ない。だが、もう一つだけ、大切なことが殘つて居る。考へて見給へ」

「ハア」

二人は、それが何であるかを、心の中で探すのに迷つてしまつた。しばらく無言で居ると、石橋氏の方から口を切つた。

「殘つて居る大切なことと言ふのは、貯金をすること、國債や公債を買ふことだ。これが前線勇士の大戰果に應へる、國民の直接の任務だ」

「ハア」

平田も、高場も、頭を掻いた。はつきりしすぎる程、はつきりした、戰時國民生活の重要義務であることを、彼等は百も知つて居て、口に出なかつたのである。それはもう、言はずもがなのことであるし、その點では、幾分、石橋氏の聞き方にまづいところが、ないでもなかつた。

「多少、わしのたづね方も惡かつたが、國債や債券を買ひ、貯金をする、といふことを忘れてはならない。また、おろそかに考へてもいかん」

「申譯ありません。決つして忘れてゐた譯ではありません」

「さうだらうとも、それはよく判る。しかし、貯金がどんな役目をするから、前線の大戰果に應へることになるか、といふことを、はつきりのみこんで置かねばいけない。君達が貯金をすると、その金で政府は、國債や債券を購入するんだ。國債や債券は、直接戰費を賄ふ資金だから、これを充分に消化しないと、前線に兵器彈藥を造つて送ることが出來なくなる。前線は絶えず、兵器彈藥の補給を大量に要求して居る。日本の兵隊が世界一強いことは、かくれもない事實だが、いくら強い兵隊でも、兵器彈藥が缺乏しては、どうにもならない。支那事變にしろ、今度の大東亞戰爭にし

ろ、支那や米英が、日本は強いといふことは知つてゐた。それではなぜその強い日本と戰爭を續ける氣になつたかといふに、何處の國でも、一つの見透しといふものをもつてかゝる。支那や米英の見透しといふのは、日本の武力といふものは、成程強いに違ひない。しかし、日本の經濟力といふものは大したものではない。二三年も戰爭を引つぱれば、日本の經濟力は衰退し、混亂をまねき、國民生活は破壞されて、其處にも此處にも不平不滿が起こる。さうすると、自然に前線への兵器彈藥の補給がにぶる。いくら強い兵隊でも、さうなつたら三つ子の手をねぢるも同然だ。と斯ふいふ見透しをした譯だ。どつこいさうはいかないぞ。日本國民は誰も彼れも、國債債券を買ひ、貯金をして前線に應へつゝある。それに貯金は、前線に應へるばかりでなく、國內的にも大變重要な役目をする。今も言つた、支那や米英が賴みの綱にして居る、日本の經濟力の衰退、混亂を防ぐために、最大の能力を示す。貯金によつて購買力の吸收をすることが出來るから、惡性の戰時インフレーションの防止が出來る。このやうに、貯金は二重にも三重にも大きな役目をもつて居るのだから、日本がこの大東亞戰爭を勝抜くも抜かんも、たゞ一つ、君達が貯金をするかせんかで、きまるといつてもいゝのだ。この波多野鐵工所は、さういふ意味から、君達のやうな一人者は、一錢でも餘計貯金をして、國に奉公させるといふ建前から、毎月の給料のうち五十圓以上は渡さないで、あとは殘らず工場の組合貯金にして居るが、誰一人、不平を言ふものもないので、

わしは大變よろこんどる」

「僕達は、いづれ兵隊に行くから、今は何もしないでいゝといふ考へは持つて居りません。どんなことで奉公するのも、奉公にかわりはありませんから、兵隊に行くまでは、貯金で奉公します」

「よく言つて呉れた。その氣持を忘れないで頑張つてくれ。わしも頑張る。戰爭がやつと、本舞臺になつて來たんだ。これからだ。お互のどしよう骨を突張つて、どうだ米英、ざまア見やがれ、といふところまで行かうぜ」

「ハア、やります」

元氣に答へた二人の聲の中には、腕を叩いて見せたい程の氣魄が籠つて居た。石橋勞務は、常に機會あるごとに工員を勵まし、推進力となつて來たし、これからも先頭に立つであらう。

そして、石橋勞務の存在は、溫厚篤實な、波多野社長の分身といつても過言ではない。

やがて、就業時間の報知があつて、機械工場のモーターとベルトの音が、力強く響きはじめた。

むすび

貯金の國家的な使命や目的、それから個人的には、その必要性について、石橋勞務が折にふれ、時にあたつて說いて居る如くで、隣組とか、工場とかの組合貯金の方法については、天引貯金と

232
221

か、つもり貯金、その外いろいろのものが、國民生活のあらゆる方向から縦横に組織され、指導と奨勵によつて實行されて居るが、特に、各個人の組合貯金に加入しながら、別個に貯金する要領、またはコツといつたものについては、從來、あまり多く語られて居なかつた。

今此處に、波多野鐵工所の從業員の、それに關する貴重な體驗を聞き得て、益々貯金增强への、參考に資することが出來る譯である。

そんな理由から、各生産職場には、それぞれの組合貯金制度が設けられて居る。

波多野幸一氏を社長とする、波多野鐵工所の組合貯金は、昭和十三年の九月から始められて居る。波多野社長が組合長で、石橋勞務が理事、組合員は現在〇〇名居る。貯蓄總額は三萬三千四百七十九圓の巨額に達して、これを一人當り平均にすると、何百圓かになる。この成績は、工場に於ける組合貯金の中では、優秀なものではあるが、それに安心してはならない。益々增强して、貯金報國の實をあげることに邁進しなければ、他の工場貯蓄組合が、波多野鐵工所に追ひつき追ひ越すであらう。此處に國民貯蓄の奉公競爭が生じる可能性がある。この競爭をして、更に昂揚せしめ、世界一强い日本の兵隊とともに、世界一强靱な國民生活を築き上げねばならない。

其處に米英を擊滅する最後の鍵がある。斷然勝ち抜くぞ、といふ口先だけのお題目でなく。貯金の實踐によつて貫き通さねばならない。一切の幸福は、其處にのみ待つて居る。

昭和十八年一月二十日　印刷
昭和十八年一月二十五日　發行

【貯蓄物語】
定價二十錢

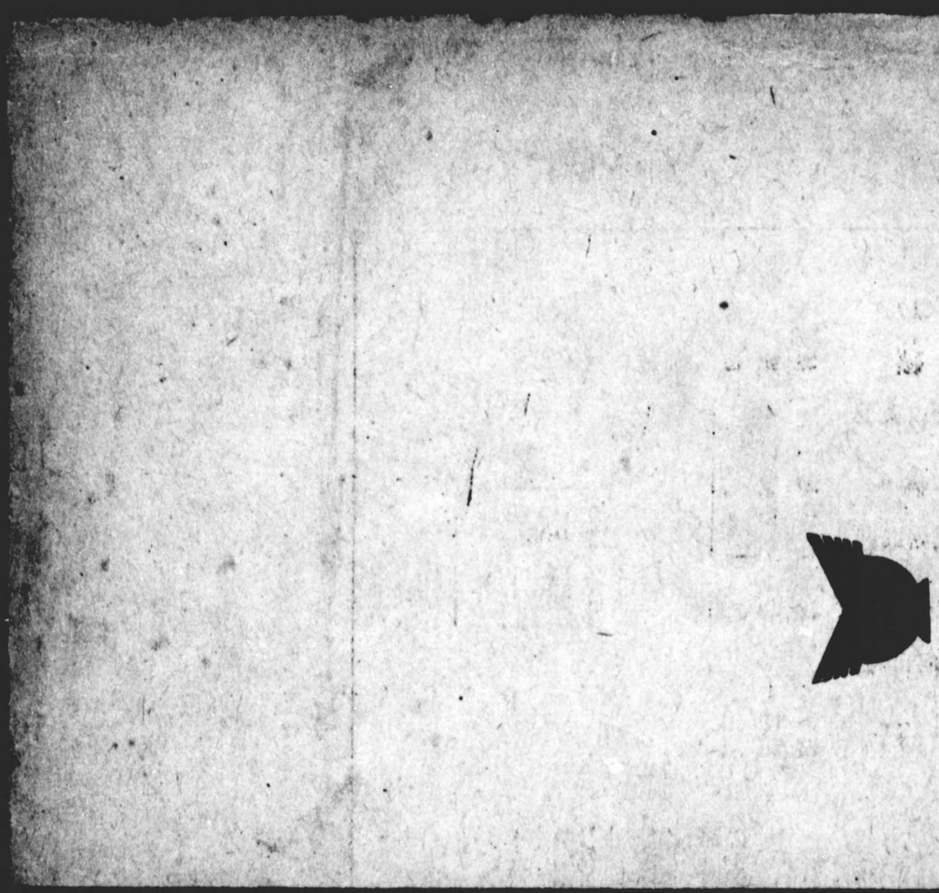
不許複製

編輯發行人　江口政吉
福岡市天神町福岡縣廳構內

發行所　大政翼贊會福岡縣支部
福岡市御原一丁目一七番地

印刷者　藤村悌次
福岡市御原一丁目一七番地

印刷所　藤村正光社
（福岡一一三）電話西七一四番



20½"